

2003年3月 卒業論文

主査 浦野正樹先生

題目

福祉ボランティアにみる自己とコミュニケーション

自分探し としてのボランティア活動

総頁数

47 頁

第二文学部 表現・芸術系専修 1d000438-8

深田 耕一郎

目次

序	2
第1章 自分探しとしてのボランティア活動	5
第1節 再帰的な自己	5
第2節 存在証明と他者	8
第3節 福祉ボランティアというコミュニケーション	9
第2章 福祉ボランティア	11
第1節 ボランティアをめぐって	11
第2節 福祉ボランティアとはなにか	14
第3章 ボランティア・ガイドブックにみる語彙とボランティア・イメージ	19
第1節 語彙をめぐる問題	19
第2節 ボランティア・ガイドブックにみるボランティア・イメージ	21
第4章 福祉ボランティアにみる自己とコミュニケーション	29
第1節 ボランティアの両義性	29
第2節 福祉ボランティアというコミュニケーションがはらむ暴力	36
第3節 福祉ボランティアに内在する問題	39
終章 自分探しと人が人を支えること	44
参考文献	45

序

佐倉体験から

なぜ私はあんなに「ボランティア」を“がんばった”のか。これがもっとも初発の問いである。あるいはなぜ“がんばってしまった”のか。

千葉県佐倉市にある佐倉市立美術館の教育普及事業⁽¹⁾に参加した。これは、毎年、夏に当館で開催される『体感する美術』という展覧会を市民が企画する事業である。2001年の11月から参加し、翌年の展覧会を企画する会議に加わった。そして、2002年の夏には展覧会を実施し、当日の運営にもあたった。この体験は私にとって有意義なものだった。ここではそれを「佐倉体験」と呼んでおこう。

「佐倉体験」はエキサイティングだった。同時に、思い起こすとき、少し気恥ずかしくなる。というのも、妙に“がんばった”からだ。自分でいうのもおかしいが、熱心に取り組んだ。なぜだろうか。理由はいくつかあると思う。だが、いちばん大きな理由は次のことではないか。つまり、私は「ボランティア」という言葉に、あるいは「ボランティア」という言葉のもとになされるコミュニケーションに振りまわされていた。

しかし、ここで立ち止まる必要がある。『体感する美術』はボランティア事業ではない。当館の公式な文章を見ても、『体感する美術』は佐倉市立美術館が毎年夏休みに行っている教育普及事業で、展示とワークショップを通じ、まちやひとと美術や美術館のかかわりを考えていくシリーズ」とあるのみだ。ボランティアという言葉は出てこない。じっさい、美術館の教育普及事業の参加者をさしてボランティアと呼ぶのも違う気がする⁽²⁾。だから、集まりにはIFS^{イフス} (Inter-art Forum Sakura) という名称があった。IFSが『体感する美術』を企画、運営する。

だから、この集まりは「ボランティア」ではない「IFS」なのだ。だが、人に伝えるとき「IFSをやっています」では通じない。かみくだいて「ボランティアをしています」と説明する。そして、人からは「ボランティアをしている」と思われることになる。そうするうちに、私じしんボランティアをしている気になってしまった。

けれど、問いはふくらんでいった。無償の活動だったらボランティアなのか。「奉仕」や「善意」ではなく、「自分のために」しているのに、ボランティアか。ボランティアなのに、ここまでしていいのか。あるいは、ボランティアなのに、こんなこともできないのか。そもそも、動機はまったく自発的ではなかったのに、なぜボランティアをやっているのか。そして、多くの時間を費やしているのはなぜか。

次のように思った。「ボランティア」という語彙に非常に多くの意味付けがされており、そのイメージに私たちは振りまわされている。「佐倉体験」とおして、ボランティアについて考えてみたくなった。

障害児とのかかわり

次に、障害児とのかかわりについて触れたい。大学一年の頃からアルバイトで自閉症児とのかかわっている。以来、彼/彼女たちとのかかわり方について考えてきた。それは楽しい。いっぽうで、もやもやしたものも残る。つまり、彼/彼女たちと私の関係性にある。それは、何かつながりえないという感じ。さらに、私が高位にたつて彼/彼女たちを動かしている感じ。その感覚が私はどうも苦手だ。対等に立ちたい。けれど、決して立てない。

もしかしたら私の考えすぎなのかもしれない。あるいはヒューマニズムなどという幻想に憑かれているにすぎないのかもしれない。だが、こういうことはあると思う。私たちはつい障害者に気を遣ってしまう。配慮は必要だ。しかし、ときにそれは過剰になる。関係がしっくりこないことがしばしばある。

おそらく、障害者にかんする問題を障害者の立場に立って考えるアプローチもある。障害者福祉とはまさにそうだとはいえる。また、障害者を差別する「社会」を問う立場もある。社会悪を糾弾し、変革を求める立場だ。けれど、私はそうした立場にどうしても立つことができない。私は障害をもつ人々とかかかわることで彼/彼女に対し優位な位置に立つことを望んでいるのかもしれないし、そのことに安息しているのかもしれない(もっとも、その立場性に息苦しさを覚えているのだが)。ということは、私は障害者を差別し排除する存在でもありうる。そのことを考慮せずに、じぶんのことを抛っておいて「社会」を問う立場に立ってしまうことはある意味で誠実でないように思う。

つまり、「私」の側に軸を置いて障害者とのかかわりを考えなければならないのではないか。私のことを解決しないで他者のことなど考えることはできない。問うべきは「私」のほうではないか。私たちは障害者とのかかわりのなかでさまざまなことをしている。他者を思いやり、あるいは、差別もする存在としての「私」。私たちが行っていることをありのままにひらくことでその関係性を考えたい。

問題意識

いま見てきたのは初発の問いである。ある違和感とっていい。だが、それらは整理されていない。この違和感を理論的な問いのかたちへと敷衍しなければならない。

「ボランティア」への問いと、障害者との関係性への問い。このふたつが重なり合うものとして「福祉ボランティア」を考えてみようと思う。すなわち、ボランティアというコミュニケーションをとおして自己と他者の関係性について考えたい。素朴だが、次のような問題意識へと向かう。なぜ自己は他者との関係を欲するのか。自己が他者と出会うことによって関係は開くのか、閉じるのか。あるいは、私たちは「社会」というなにかえたいの知れないものに振りまわされ続けているのではないか。そこには、他者と出会ってはすれ違い他者と出会ってはすれ違いしていく「私」が見てとれるのではないか。

ここにひとつの仮説を挟みたい。ボランティア活動を 自分探し の行為として仮定する。

自分探し をくり返す存在として「私」を想定してみようと思う。ボランティアは「自分のため」であって「他人のため」であるといった両義的な側面がある。このことがボランテ

ィアと呼ばれる営為を複雑にし、捉えにくくしているのではないか。また、人が人を助けること、あるいは人が人を支えることの困難さとかかわっているのではないか。

第1章では問題意識を明確にする。再帰性、存在証明という概念から自己を捉える。第2章ではボランティアと福祉ボランティアについて、一般的な理解を整理する。第3章ではボランティアの意味付けが過剰になっているという仮説から、ボランティアにかんするイメージ(以下、ボランティア・イメージとする)をひもといていく。方法としてはボランティア・ガイドブックにみられる語彙を拾うことでそれを試みたい。つまり、言説分析である。言説を知識社会学のアプローチから考察していきたい。第4章では3章で見たボランティア・イメージに検討を加える。さらに、そのイメージにそいながらボランティア参加者の語りを取りあげる。ガイドブックに見られる語りと、聞き取り調査から得られた語りを埋め込んでいく。自己とコミュニケーションを照らし出す。終章では記述したことを俯瞰したうえで、自分探しとケアという関係性、つまり人が人を支えるとはどういうことかという問いを問題にする。きわめて不十分な私見だが、それをまとめとしたい。

注

(1) 本事業の成立と展開については当館学芸員である永山智子氏が「佐倉市立美術館におけるボランティア活動」『MUSEUM ちば 千葉県博物館協会紀要』第33号(千葉県博物館協会編、2002)にまとめている。

また、嶋崎・清水(2001、pp74-82)にも当館の取り組みが紹介されているので参照されたい。

(2) I F Sのメンバーに一度聞き取りをしたことがある。「ごじしんの活動をどのように位置付けていますか」という問いにたいし、次のような回答があった。「楽学(楽しく学んでいる)」「(20代、女性、学生)」「好きでやっている」「(20代、女性、家事手伝い)」「趣味的なスタンス」「(40代、女性、主婦)」「道楽でライフワーク」「(40代、女性、公務員)」「自分が楽しんでいる。ポケ防止」「(40代、男性、会社員)など。ただ、注記しておかなければならないのは、この取り組みは美術館が主催しており、よって、本グループには組織的な運営が必要にならない。そのことから、メンバーは他のボランティア・グループに見られるような重労働化を回避することができ、意識的に自己実現に徹していたと考えられる。

第1章 自分探しとしてのボランティア活動

第1節 再帰的な自己

ボランティアという語彙は過剰な意味が付与されている。ボランティアを定義しようとするとそれはするりとすり抜けていく。つまり、捉えどころがない。だから、ボランティアを分析するにあたっては様々なアプローチが可能になろう。本稿ではボランティアを 自分探し の活動として焦点化すると述べた。付着した意味を確認し、明確化したうえで 自分探し としてのボランティアを考える。

最初に、ボランティアという語彙をどのように扱うか、示しておきたい。現在、流通しているボランティアという語彙は、行為主体をさす場合もあれば、その活動内容、あるいは活動形式をさす場合もある。そこで、本稿ではボランティアと称される事象について、その行為主体を「ボランティア」、その行為を「ボランティア活動」と呼びたい⁽¹⁾。

さらに、なぜボランティアか。それは仕事でもなく、趣味でもない領域とされるからだ。つまり、そこには別様の「私」が立ち現れてくるであろう仮説がある。そのことが 自分探し と接合すると考えられる。

自分探し という語彙についてはどうか。ほんとうの私探し といってもいいかもしれない。この言葉は肯定的にもまた批判的にも理解される。肯定的にという意味は、いまの自分に満足しないでもっと自分を高めようという態度が、人生に対する積極的な姿勢として評価されているという点で。批判的にというのは、ほんとうの自分探しにこだわりすぎることによって、常にいまの自分を否定的にしかとらえられなくなり、「生」を損なってしまう危険を伴う危険があるからだ。「ほんとうに自分らしくある場所は存在するだろうか」「自分をいかにさせる場所はあるだろうか」という問いをさす。ここでは、わたしたちが毎日のように行っていることとして設定している。ある青年期に特有の状態、あるいはある志向性をもった特定の者をさすのではない。

自分探し をくり返す存在としての「私」。それが本稿の問題意識である。そのことがコミュニケーションに力をもたせるのではないか。また、その力に私たちは振りまわされ続けるのではないか。では、この自分探しという語彙について社会学はどんな道具を提示してきたのだろうか。ここでは二つの概念装置を用いたい。

第一に再帰性概念である。ギデنزによれば、近代社会は次の三つの点で特徴づけられるという（Giddens、1990[=1993]、pp72 - 73）。第一に時間と空間の分離。これは、時間空間が無限に拡大化していく条件であり、時間と空間の正確な帯状区分の手段となる。つまり、空間的に距離があっても、時間的には瞬時に情報を伝達することが可能になり、人々は地球規模で社会関係を結ぶようになる。第二に脱埋め込みメカニズムの発達。この脱埋め込みメカニズムは社会的活動をローカルな脈絡から「切り離し」、社会関係を時空間の広大な隔たりに超えて再組織化していく。すなわち、人々の行為のやりとりが当事者間の範囲から離

れ、普遍的な領域で流通し、妥当し、適用されるようになる。たとえば、「貨幣」や「法体系」、「科学技術」はこれを支えるシステムである。

第三に「再帰性 (reflexivity)」が社会の基盤になったこと。再帰性とはおおまかにいって、自分じしんの行為を振り返り、その文脈や意味を知ることだ。「再帰性は人間のすべての行為を規定する特性」であり、近代に固有のものでは必ずしもない。だが、近代に入り、それは前近代とは異なる特質を呈し、社会全体の基礎に位置するようになった。

再帰性は、システムの再生産の基盤そのもののなかに入り込み、その結果、思考と行為とはつねに互いに互いを反映し合うようになる。日常生活で確立された型にはまった行いは、『以前なされた』ことがらが、新たに手にした知識に照らしてりにかなうかたちで擁護できる点とたまたま合致する場合を除けば、過去とは本来的に何の結びつきももたない。あるしきたりを、それが伝承されてきたものであるという理由だけで是認することはできない。伝統は、一定の知識 伝統によってはその信憑性を確かめられないような知識 に照らしてのみ正当化することが可能なのである。(前掲書、p55)

近代以外の社会において、行為や制度は伝統に従ってきた。だが、近代社会の場合、行為や制度が伝統性を帯びていてもそれが正当化されるとは限らない。行為や制度は、それについて得られた最新の情報に照らしてたえず吟味、改善され、まさに、そのことによって正当性を得ることができる。すなわち、近代社会は自己吟味と改善が「見境もなく働く」社会であるといえる。

このように社会のあらゆる領域に組み込まれた制度的な再帰性は自己、つまり「私」にたいしても作用する。ここからは、浅野(1997、pp.66 - 70)の整理にしたがって近代的な自己について見て行く。ギデンズはこのような制度的再帰性が「私」という現象の成り立ちを根底から変容させていくだろうと論じた。そこで描かれている現代的自己を整理すると次のようになる。

第一に、自己はたえず再帰的に創り出され、作り直されながら進んでいくものであるということ。社会全体がそうであるのと同様に、「私」もたえず吟味され、作り直されることではじめて自分じしんにとって何者かであり得る。「私」とは「私」じしんが創り出したもの、そして「私」じしんによってたえず作り直されていくものなのだ。第二に、「私」とは過去から現在、そして未来へといたる人生の軌跡、ひとつの統一体であるということ。第三に、どのような「私」を創り出すのかは、本人じしんの内部にある基準によってのみ決まるということ。基準は外部 たとえば、生地、身分、人種、性別、部族、家柄、等々 からは与えられない。それは内部に、自分じしんの内側にのみ見いだされるものだ。

近代以外の社会においては、自分が何者であるのかということは、さまざまな外的条件から選択の余地なく決められてしまうことが多い。「私」のアイデンティティは、「私」じしんの関与を待たずに決定されてしまうのである。それに対して、制度的再帰性を基礎に据える近代社会は、そのような外的条件をことごとく吟味・改変の対象とするために、「私」が何者であるのかを決定するための基準を次第に外部から内部へと移動させていくことになる。

近代社会が産み出した「私」は、したがって、自分が何者であるのかを自分じしんで決定しなくてはならないような自己であり、しかもその決定のための基準じたいをも自分じしんのうちに見いださなくてはならないような自己なのである。

ギデンズの考えでは徹底的に進められた再帰性はかえってその社会のなかに生きている「私」のあり方を根本的な不安にさらすことになるという。

「再帰性」とは、どのようなことがらについても他によりよい選択肢があればそちらを選ぶということ、要するにあらゆることがらが「選択」の対象となるということである。このとき選択が必ず二重のものであるということに注意を払いたい。第一に、与えられた複数の選択肢のなかから最良のものを取り出すという水準の選択がある（通常「選択」と呼ばれているものはこれだ）。けれども、その選択の背後には、選択の前提を選び出すというもうひとつの水準の選択がなければならない。どのような選択肢のなかから選ぶのか、またそのなかで何を最良と考えるかはこの第二の選択によって決まってくるだろう。

「あらゆることがらが選択の対象になる」とギデンズがいうとき、重要なのはこの第二の水準の選択だ。近代以外の社会にも何かを選択する機会がないわけではない、というよりも生きているかぎりどのような社会においても人は日々何らかの選択を迫られる。しかし近代以外の社会においては、選択のための前提それじたいはあらかじめ選択の余地なく与えられていることが多い。すなわち、そのような社会では、いくつかの選択肢はそもそも考慮に値しないものとしてあらかじめ排除されてしまっているのである。近代社会が他の社会から明確に区別されるのは、この選択の前提（どのような選択肢集合のなかから選択すべきかということ）そのものをも選択するという点においてなのだ。その結果どのような選択も最終的には「当事者が選んだ」という以上の根拠をもち得ないことになるだろう。このことをギデンズは次のように表現している。

定義上、伝統や既成の習慣は、生活を比較的きまったチャンネルのうちに秩序化する。近代は、個人を複雑で多様な選択に直面させる。と同時に、その選択は根拠を欠いたものであるために、どの選択肢を選ぶべきかについてそれはほとんど何の助けも与えないのである。

「私」が「私」じしんを再帰的に形成していくという過程もこれと同じような二重の選択を含んでいる。伝統的な枠組みが強固に維持されている社会では、自己が何者であり得るのかを選択するための前提（自分になりうるものの集合）はあらかじめ狭い範囲に決められていることが多い。けれども、再帰性が社会全体へ拡大し深化するのにもなって、そういった前提が相対化されて選択の対象となっていくために、どのような「自分」を選んだとしてもそれは伝統的な社会でのような確からしさをもつことができなくなっていくのである。どのような「私」も、その「私」の存在に先立つ確かな根拠・土台をもち得ない、すなわち「私がそれを選んだ」という以上の確固とした根拠をもち得ないのだから。

このことは二つの意味で人々の自己を不安にさらし、彼らを限りない自己探究へと駆り立てることになる。第一に人々は、しっかりした秩序の枠組みのなかに自分じしんを位置付け

ることができないので、「私」がいまここにいることの意味をはっきりと感じとれなくなる。「私」は、いまあるのとは違ったようにもあり得るものとして宇宙のなかに一人きりで放り出されてしまう。と同時に、第二に、人々が自分じしんの存在に何らかの意味を見いだそうとして根拠を探し求めるとき、見いだされるいかなる根拠もそれが探し求められ選び取られたものであるというまさにそのことによって、それもまた「私」の選択の結果でしかないということによって、求められていた確かさを失ってしまう。つまり、確かな自分を探し求める旅がしっかりした土台の上に着地する可能性は、そもそもそれが求められているということそれじたいによってあらかじめ奪われているのである。かくして「私」の不確かさはやむことなく、自己探究の旅は果てしなく続いていくことになる。

第2節 存在証明と他者

自分探し という語彙をめぐって、もうひとつ、社会学が開発してきた道具がある。存在証明という概念だ。それは、つまり、自分が価値ある存在であること、あるいは無価値な存在でないことを証明することである。これをさして「存在証明」と呼ぶ。石川准の論考が有益だ。

人は存在証明に躍起になる。「私」とはアイデンティティの集合、アイデンティティの束である。私たちはこうした自分のアイデンティティを操作することに対してじつに意欲的である。望ましいアイデンティティを獲得し、望ましくないアイデンティティを返上しようと日夜あらゆる方法を駆使する。これが存在証明、あるいはアイデンティティ管理である。私たちは自覚するとしなやかにかかわらず、この存在証明に膨大な時間とエネルギーを使う。私たちは「自分がいかに価値のある人間であるか」ということを躍起になって証明したがつている。「私」の価値を人や自分に対して証明せずにはいられない。人が存在証明に没頭するのはそのためだ。

だが、なぜ私たちは存在証明にそんなにも熱心なのだろうか。それは私たちが、自分という存在そのものには何の価値もないと信じているからである。価値のある人間になるために私たちが努力を惜しまないのはそのためだ。内心の自己嫌悪が強いほど存在証明は熱を帯びる。私たちは存在証明に躍起になり、人生の大半はそのために消費される。

以上が存在証明という概念の意味するところだ。ここで、他者が出現してくる。他者と出会うことについて考える必要がある。

存在証明はじつは危うい。自己を維持することが他者を破壊したり自己を破壊したりすることが起こりうるのだ。そのような関係が成り立つことがある。このことを仔細に検討したのは奥村隆であった⁽²⁾。

ふだん私たちは何気なく他者とかがかかわっている。けれど注意してみてほしい。私たちは他者と接するとき、実に多くのことを行っている。たとえば、会話をするとき、話し相手の目

を見る。あるいは見つめすぎるのも不具合なので適当に視線をそらしたりする。それから、微笑んだり、うなずいたりする。こわばった顔で人の話を聞く人はまずいない。このようになめらかな関係をつくるために多くの技法を使っている。

それから、感情の面でも私たちは多くの技法を使っている。たとえば、「思いやり」というものがある。思いやることは素晴らしい。私たちは他者を思いやることで関係をなめらかなものにしている。そして、共感し安らぎを得る。これらのことをまるで呼吸をするのと同じように行っている。技法を媒介とすることである生きやすさを生んでいる。

けれども、これらの技法はなめらかさばかりを生んではいけない。むしろ、他者とともにいることの難しさばかりが実感されることも事実だろう。現に「思いやり」が他者には届かないことはしばしば起こる。思いやりが拒絶されることもある。反対に心の底から他者を思いやることのできない自分に嫌悪を抱き悩むこともある。それから、他者を思いやろうとするあまり、自分を見失ってしまうこともある。「思いやり」という技法は社会的に善とされてはいるが、それはある生きづらさを生むことにもなる。他者とかかわることはじつに困難なことなのである。

第3節 福祉ボランティアというコミュニケーション

私たちは再帰的で存在証明に躍起になる。これが、前節で見てきたことであり、本稿で扱う「自分探し」概念の含意するところである。本稿ではボランティア活動を「自分探し」の営みとして課題設定する。そのボランティアというコミュニケーションにおいて私たちはじつに様々なことを行っている。それを明らかにしようというのが目的である。ボランティアという語彙、ないしその語彙のもとになされるコミュニケーションに振りまわされ続ける「私」を描こうというものだ。

ここでは「福祉ボランティア」のコミュニケーション世界に目を向ける。コミュニケーションという術語は多義的である。ここでは、自己内的な相互作用、自己と他者の相互作用としておきたい。そもそも自己は他者とのかかわりのなかから社会的に構成される。人間の自己は他者を鏡として、鏡としての他者を通じて知ることができる。自己は「鏡に映った自己」(Cooley)として具体的に現れる。他者が自分をどう評価しているかを知ることによって自分のあり方を知ることができる。自己はこのように他者との関連で社会的に形成される。

では、「福祉ボランティア」のいかなる特性に注目しようとしているのか。「福祉ボランティア」の概念については次章で詳しく見る。ここでは暫定的に、「福祉ボランティア」を福祉領域におけるボランティア活動に従事する主体と定義しておきたい。そして、福祉ボランティアが被介護者にどのようにかかわっているのかを明らかにしていく。

福祉ボランティアに目を向ける理由は次の問題意識からだ。再帰的な自己が存在証明を企図することによってボランティア活動に向かう。そこでは「私」が具体的な他者を求めていると考えられる。「具体的な他者」とは高齢者、障害者をさしている。すなわち、被介護者

という具体的な他者からの承認が、福祉の領域では容易に達成されるように見える。他者から承認されることで、自己の存在証明が果たされる。自分探しとはこのプロセスをさしている。本稿で注目したいのはこのようなボランティアが実践される過程におけるコミュニケーションである。

ところで、ある民間団体が発行する冊子に次のような記述がある。

今、ボランティア活動の中で自分を見いだそうとする若者が増えてきている。しかし、「自分探しのためのボランティア」は、活動を始めるきっかけとしてはあり得ても、このような協働作業⁽³⁾なしに「自分探し」だけが目的になると、活動の中で関わる相手や自分を傷つけてしまうことさえある。(森口、2001、p.183)

この文面を読んだだけでは意味するところが伝わりにくいかもしれない。だが、上で見た、再帰的で存在証明に躍起になる自己を思い出して欲しい。自己を維持することは他者を破壊し、自分じしんを破壊する可能性をはらんでいる。コミュニケーションは暴力をはらんでいるということ。この問題意識を携えて福祉ボランティアの世界をつぶさに観察していこうというわけだ。

二つ道具を得た。第一に再帰性概念、第二に存在証明概念である。この道具を携えて福祉ボランティアの様態を見ていく。本稿で考えたいのは福祉ボランティアというコミュニケーションの世界で様々なことが行なわれているということだ。

そのまえに少しだけ遠まわりして、ボランティアについて詳しく見ておきたい。次章ではまず、ボランティアの外延を明確にし、そのうえで内包的な語彙を探る。外からの構図、つまり、概念整理や歴史的経緯を確認した後、ボランティアの内側に迫っていく。

注

- (1) ボランティアにかんする一般的な定義は第2章で詳述する。「ボランティア」という概念にかんしては「市民活動」「NPO」「ボランタリー活動」などの類似概念、関連概念が提出されているが(李、2002) 本稿では「ボランティア」という語彙がもつイメージに関心を向けるため、最も流通性の高い語彙である「ボランティア」を採用している。よって、本稿はボランティアの定義を詳細に検討することや実践にかんする方法論の検討を目的とするのではない。
- (2) 奥村、1998 参照。また、本稿は氏の著書から多くのことを学んでいることを記しておきたい。
- (3) ここでは「ケア」の特性に触れ、それが目に見える行為や働きかけにとどまらず、ともに「悩んだり、傷ついたり、支えられたり、癒されたりする人間的な協働作業」であることを強調している。

第2章 福祉ボランティア

第1節 ボランティアをめぐって

前章では課題設定を行い、本稿におけるボランティアの位置付けを示した。本章ではボランティアを外から捉えていく。つまり、概念の整理、歴史的経緯の把握に努める。

ボランティアの三原則

まず、一般的にボランティアと呼ばれる事象について概観しておこう。ボランティア活動歴の長い民間機関が提出する見解、ならびに公的機関が示した見解を一般的なボランティア像として確認しておく。もっとも、ここでは、あくまで暫定的な位置付けとして言説を整理するにとどめる。ある民間機関が発行した『ボランティア白書・1995年版』はボランティアを以下のように規定している。「[ボランティア活動は]『個人が自発的に決意・選択するものであり、人間の持っている潜在的な能力や日常生活の質を高め、人間相互の連帯感を高める活動である』とされている(1990年 IAV 総会における『ボランティア宣言』より)。また、ボランティア活動はつぎのような理念によって語られることが多い。すなわち 自発性(自立性) 無償性(非営利性) 公共性(公益性) 先駆性(社会開発性)である。また、社会福祉審議会の意見具申(1993年)では、「ボランティアは、一般的には自発的な意志に基づき他人や社会に貢献することをいい、その基本的な性格としては、一般的に、『自発性(自由意志性)』『無給性(無償性)』『公益性(公共性)』『創造性(先駆性)』が言われている」とされている。このような一般的理解を踏まえて高萩盾男はボランティア活動を次のように規定している。「第一に、個人の自由意志のもとに、だれからも強制されることのない自立的・自発的な活動であること。第二に、活動に参加したボランティアに対する報酬は期待されないこと、すくなくとも金銭的には無給であり、営利を目的としないこと。第三に、個人・家族あるいは企業にみるような私的な関心や利益を追求するのではなく、公共的・公益的ないとなみであること。第四に、人びとや社会のかかえている問題・課題を代弁し、先駆的・開発的にとりくみ、社会の発展に寄与すること」(高萩、pp.7-8)。

ただし、これらの4条件は相互に独立したものでも、並列的なものでもない。例えば、二つ目の無償性は一つ目の自発性と関係しているように思われる。また、四つ目の先駆性はそれ以外の3つの条件が外延的であるのとちがって内包的な規定であり、つまり個々人の体験や状況によって異なりを見せることがうかがえる。

ボランティアの変遷

わが国のボランティア活動、ボランティア観の変遷については筒井のり子がまとめている(巡・早瀬編、1997、pp.20-30)。また、李もボランティア活動の歴史的経緯について整理している(李、2002)。これらを参考にし、わが国におけるボランティアの成立と展開を確認しておきたい。ここでは、ボランティアがいかなる社会的背景のもとに起こり、どのよ

うに受容され、また、意味が付与されてきたかを通覧する。そうしておくことは、現代におけるボランティア、あるいは本稿が問題とするボランティアの様態を照射することに有益であると思われる。また、福祉ボランティアの歴史的経緯については次節において詳しく見る。

日本にボランティアという語彙が紹介されたのは明治期後期、あるいは大正期であるといわれる。しかし、まだそれは一部の専門家の専有物であった。一般の人々に普及したのは戦後、1970年代以降のことである。戦前の特徴として、第一にボランティアを原初とした民間社会事業が生成していったこと、第二にセツルメント⁽¹⁾が活発に展開されたことがあげられる。それらはボランティア活動の源流であった。だが、1931年の満州事変以降、戦局が悪化するにしたがい、セツルメントは閉鎖され、民間社会事業はすべて戦争遂行の目的のなかに回収されていった。こうして、ボランティアは後景に追いやられ、動員型の勤労奉仕活動一色になっていく。この、戦時中における互助活動の奉仕色が戦後になって否定的な意味をもち、ボランティアが敬遠される一因になったことは、多くの関連書が指摘するところである。

敗戦直後の混乱期においては浮浪児保護、非行防止の活動が有志によって展開された。その後、共同募金運動、赤十字奉仕団が開始され、それら組織のなかでボランティアが活躍した。さらに、BBS運動⁽²⁾、学生セツルメントなどが盛り上がりを見せていく。この時期の活動主体はもっぱら学生で、慈善・救済活動的色彩が強かった。だが、いっぼうで社会福祉領域でのボランティアが急速に減退して行くことになる。

その因として、占領軍の統治政策、ならびに、以後の政府の政策があげられる。戦後、占領軍が提示した「公私社会福祉分離の原則」に基づき、ボランティアに活動する民間社会福祉団体への公的助成が禁止されたためである。だが、その後、民間福祉団体が深刻な財政状況に陥ったため、社会福祉事業法に「社会福祉法人」の規定を設け、設立認可、定款の変更等の公的な記載条項を定めた。これにより、社会福祉法人は“公の支配に属する”ものとされ、公的助成が行なわれていく。この経緯から社会福祉法人となった民間の社会福祉団体の多くは財政的に安定するいっぼう、政府からの強い指導・監督を受けることになり、ボランティアは後退していった。福祉は国が管理するもの、ボランティア活動は行政の責任転嫁を招く、といった認識が広がったという。

1960年代に入って、高度経済成長政策のもと経済が著しく発展した反面、国民の所得格差の拡大、生活環境破壊、地域社会、家族機能の解体等が進行した。とくに、産業公害問題は深刻であったため、全国各地で改善を求める市民運動が起こった。また、ボランティア活動推進のための機関・団体がいくつかに生まれている。徳島や大分の社会福祉協議会に「善意銀行」が設立された。このころは、まだ一般市民に「ボランティア」という言葉が普及しておらず、そのイメージも「善意銀行」という名称からもうかがえるように、「善意」による活動という意味合いが大きかった。

いっぼうで60年代後半になると、ボランティアたちが草の根的に結成した推進団体が東

西に生まれてくる。65年に現在の「大阪ボランティア協会」、「富士福祉事業団」(東京)が相次いで発足した。これらの団体は「善意」だけでは活動が円滑に進まないことを意識化し、ボランティアの教育・訓練の必要性を指摘、ボランティアスクールの開催を開始した。この時期の活動分野としては施設内におけるボランティアが多かったとされる。

1970年代に入り国民は、過疎・過密の進行、石油ショック、電化による家事の省力化等を体験する。60年代に生じた公害の発生による市民運動は、安保闘争や反万博運動を引き継ぎながら大きな盛り上がりを見せ、ボランティア活動にも大きなインパクトを与えたという。また、この時期、障害者グループの運動が、「善意」ではあるが社会性や人権意識に乏しいボランティア活動を強く批判した。こうした市民運動や障害者運動からの問題提起を受け、ボランティアやボランティア推進団体のなかで、改めて従来の「慈善的」あるいは「善意」の活動イメージを払拭し、市民運動の理念ともつながるような「ボランティア活動像」を確認する動きが出てきた。すなわち人権の擁護や自治の精神を重視する社会性をもった活動であるという認識である。この時期、ボランティア界では「ために (for) ではなく、ともに (with)」という表現がしばしば用いられたというが、これはボランティア観の変容を示していよう。

60年代の後半から始まった政府によるコミュニティ政策が70年代に入って本格化、高度経済成長とともに地域社会や家族機能の解体が進んだこと受け「コミュニティ形成」の重要性が叫ばれるようになる。そして、コミュニティ政策はボランティア育成・振興策と結びついていく。厚生省は73年に都道府県・指定都市の社会福祉協議会の「奉士銀行」、75年には市町村の社会福祉協議会の「奉仕活動センター(現・ボランティアセンター)」に国庫補助を開始、また文部省も「婦人ボランティア活動促進事業」をはじめさまざまなボランティア推進策を展開していった。ボランティアの活動主体に主婦層が増え、活動分野は地域に拡大し、活動内容も多様化していく。ここにいたり、戦後続いてきた「社会福祉はすべて国の責任」「ボランティア活動は行政の責任転嫁を招く」といったボランティア活動に対する否定的な見方は崩れ、以後、政府による積極的な関与が拡大していく。

80年代に入って一般市民のボランティア活動への関心と実践は大きく広がったという。ここにはふたつのベクトルが重なりあって作用していた。つまり、国民の高齢化社会に対する問題意識の高揚と政府によるボランティア振興政策である。とくに社会福祉の分野では、「施設福祉」中心の政策から「在宅福祉」への転換が図られ、それにともない「在宅ボランティア」の必要性が強調されるようになった。たとえば、給食サービス、訪問活動、在宅介護活動、外出介護などがあげられる。当時は在宅福祉制度じたいが脆弱であったため、主婦層を中心とした人々が「高齢者問題」に切実な関心を向け、上の活動が活発化していった。このことは、政府が示した「日本型福祉社会」政策を反映したものであったともいえる。こうしたことから、政府のボランティア振興政策は積極性を増し、多くの省庁がボランティア関連施策を発表していく。また、この後、全国の市町村社会福祉協議会に「ボランティアセンター」が設置されていくことになる。だが、高齢者介護問題について国が明確な方向性を

示していなかったため、ボランティアは翻弄されることになる。というのも、介護とは継続性が求められ、医療や保険の知識、技術も必要になるため、ボランティアでそれを担うことには限界があった。ここから「非営利の有償ケアサービス活動」が登場する。しかし、当時はボランティア活動と非営利活動が混同されるなど、ボランティア活動の無償・有償論議が各地で展開された。このように、80年代はボランティアのありようが手探りで模索された時期であった。

90年代に入り、ボランティアは確実に人々のなかに根をおろしてきたという。企業の社会貢献活動（企業フィランソフィー）が広がったのもこの頃からだ。そして、最大のメルクマールは1995年1月に発生した阪神・淡路大震災におけるボランティアの活躍である。これを大きな契機とし「ボランティア元年」という語彙が生まれ、行政・企業・市民が協働して構成する「市民社会」の創造がうたわれるようになる。ここを発端にし、NPO法案が成立するなど、ボランティアを取り巻く環境は次の段階を迎えている。

以上がボランティアの歴史的経緯である。次に本稿が考察の対象とする「福祉ボランティア」に関心を移そう。

第2節 福祉ボランティアとはなにか

福祉ボランティアを概観しておきたい。福祉ボランティアとはどんなひとか、定義、その時間的・空間的な特質、サブボランティアとそれらの類型化、わが国の福祉政策の変遷などを確認する。暫定的ではあるが、明確にしておく。ただし、本稿は福祉ボランティアじたいの分析を目的としているのではない。一般的な福祉ボランティアの概念を整理するのみである。そのことに留意されたい。福祉ボランティアの位相を切り取り、本稿が問題とする点を照らす。

その前に、福祉という語彙じたい、漠然としている。福祉そのものの概念を入念に検討することは本稿の目的ではないが、簡単に確認をしておかなければならない。「福祉」とはなにか。『社会学事典』は「人々の生活の望ましい状態をさして規定される場合と、生活問題の予防・解決をめざす制度・政策としての社会福祉を呼称される場合がある」(p757)としている。それに準じるならば本稿で用いる概念は後者にあたる。さらに、社会福祉の概念が多様化、複雑化していることをふまえ、社会福祉を次の三つにまとめている。「(1)最狭義に社会福祉事業法に規定される範囲をさす場合。おもなものは、児童福祉事業、老人福祉事業、母子および寡婦福祉事業、身体障害者福祉事業、精神薄弱者福祉事業である」、「(2)個人的・社会的な生活破戒・生活障害たる生活問題の解決、予防をめざす活動をさす場合。この活動には前述の社会福祉事業のほか、公的扶助、年金保険、医療保険、児童手当が一般に含まれるが、失業保険、業務災害補償、保健対策、住宅対策などを含むこともある」、「(3)幸福な状態あるいは満足している状態をさす場合」(p423)。

以上が福祉概念であった。では、福祉ボランティアという呼称が用いられる場合、その含

意するところはなにか。それは、上でいう社会福祉概念のなかの(1)の文脈がもっとも妥当であろう。すなわち、暫定的に、福祉ボランティアは「社会福祉事業法に規定される範囲」におけるボランティアであると定義することができよう。だが、一般に「福祉ボランティア」と称される主体、および活動はそれにおさまらないあいまいさやふくらみをもつ。ここからここまでが福祉ボランティアであるといった範囲を明確に定めることは、事例ひとつひとつを確認したうえでないと難しい。ボランティアという概念がそうであったように、福祉ボランティアについてもそれを同定しようとすれば、するりとすり抜けていく。であるから、ここではいくつかの断面を切り取ったうえで、福祉ボランティアの位相を確認することとした。

そこで、福祉ボランティアの分類を試みる。そして、類型化したうえで俯瞰したい。さらに連字符付きのボランティア活動がサブカテゴライズされることになる。それらを分類することは、つまり福祉ボランティアを類型化することになる⁽³⁾。

ここでも、厳密に類型化することは困難であろうが、いくつかの類型軸を想定することは可能であろう。ここでは、その形態特徴を基準として、いくつか単純な類型化を行うことができる。ここで行う作業は4つの位相を想定し、福祉ボランティアのイメージを明確にすることである。それぞれに()活動主体、()時間軸、()空間軸、()活動の質的内容といった基準による類型軸を想定する。

()の活動主体にかんして分類を試みる。社会的属性から見ると、年齢や職業による類型化ができよう。つまり、学生ボランティア、主婦ボランティア、勤労者ボランティア、高齢者ボランティア等が想定できる。参加動機パターンからは社会貢献、趣味、生きがい、自己実現、技能習得などがあげられる。技能性についてみると、専門ボランティア、非専門ボランティアとに区別できる。手話、点字、ガイドヘルプなどは習得するには訓練を要するから専門ボランティアといえる。主体規模では、個人、グループの人数、資金、ネットワークの規模等が想定できる。また、グループの特性から、個人グループ、地域集団、企業が推進するもの等、区別できる。主体の所在地をみると、都市部、非都市部での区別が可能になる。

()の時間軸についてはどうか。活動周期、時期についての分類。単発のイベントに参加する場合や、一週間に一度、一ヶ月に一度など定期的な活動、夏期のみ活動といった場合、あるいは不定期の場合が考えられよう。そして、継続性が見られる場合、活動期間から、短期、中期、長期など、継続期間による分類が可能だ。

()の空間軸についてはどうか。まず、活動場所による分類ができよう。福祉ボランティアの特質として次の二つが活動場所としてあげられる。すなわち、在宅と施設である。「在宅」支援は自立生活を営む対象者に行う活動をいう。日常生活への援助である。「衣服の着脱、食事・入浴介助、簡単な住宅改善など、また新聞や手紙などの朗読、通院・買い物などの外出介助等々生活全般にわたって援助することになる」(『福祉ボランティア』1995、p45)。高齢者には「会食形態による食事サービス、誕生会、保健についての講座等々」が

あり、障害者には「当事者同士(本人や家族)が集い、互いの情報交換などを行なう場作り」、児童には「おもちゃ図書館」や育児相談等がある(前掲書、pp45 - 46)。「施設」について見てみると、社会福祉関連の施設⁽⁴⁾や病院、なかには学校もその範囲に入り、そこで実施されるボランティアを施設ボランティアと呼称している。その他、屋外での余暇活動、自宅における収集活動等もあげられる。活動範囲で見るとどうか。活動地域を限定しているか、広域で実施しているか等の区別ができる。

()の活動の質的内容についてはどうか。援助対象者を特定し分類することができる。具体的には次の三つが主なものである。すなわち、高齢者にたいする活動、障害者にたいする活動、児童にたいする活動。技術レベルでは、専門的な技術を要するか、非専門的な活動であるかを区別することができる。活動の具体的内容については直接活動と間接活動とがある。直接活動では在宅訪問活動、食事サービス、移送サービス、病院ボランティア、施設ボランティア、里親、ガイドヘルプ、キャンプ活動などがあげられる。間接活動では手話、要約筆記、点訳、音訳、拡大写本、玩具・遊具の考案作成、日用品・衣類の考案作成、切手収集などがあげられる。また、直接活動、間接活動と区別するかたちで、他に使用済み切手やテレホンカードなどの収集活動、募金活動、献血、アイバンク・イヤバンク・骨髄バンクなどの各種臓器バンク、相談・助言活動、演芸活動なども福祉ボランティアの範疇に入るとされる。上記の対象者に対し、上に見たような直接的あるいは間接的活動を実施する領域が福祉ボランティアである。

いくつかの断面がはっきりしただろうか。これらの位相が相互に相関しあった活動が福祉ボランティアとよばれる事象である。だが、これらの類型軸は福祉ボランティアの外的な特徴をとらえ、それらを整理することには役立つかもしれないが、多様に展開する福祉ボランティアを統一的に把握し、その全体像をつかむには断片的過ぎるといえる。活動の内的な組織性、集団内の特性などについては本稿の射程を超えるし、また目的とするところではない。福祉ボランティアについての社会学的な研究は乏しいのが現状だろう。研究の今後の進展に譲りたい。

福祉ボランティアの社会的背景

ボランティアじたいの歴史的経緯は前節で見た。ここでは福祉ボランティアに限定して見ていく。確認したようにボランティアそのものは福祉の文脈のもとで生起し、変遷してきたのであった。そこで注目すべくは1970年代以降の福祉ボランティアの隆盛である。

福祉への参加が注目を集め始めるのは1960年代後半から1970年代にかけての住民運動の高まりを契機にしている。高度成長の翳で顕在化し始めた、都市問題、環境・公害問題への住民の対応がそれである。自治体レベルで住民が民主的に政策を策定しようと要求し、「上からの」計画に対する「下からの」計画を求める動きであった。つまり性質としては行政への住民の要求、あるいは政策阻止が特徴的であった。このように当時は政策に対抗する「計画」への「参加」、すなわち「政治参加」を意味したといえる。

さらに革新自治体の登場が「政治参加」を後押しする。革新自治体がこぞって採用した「シビル・ミニマム」概念は「権利としての市民参加の策定」を謳い「市民自治による市民福祉」を標榜した。

しかし、オイルショックを契機とした低成長の常態化は政策に大きな転換を迫る。同時に「シビル・ミニマム」批判も噴出し始める。つまり「計画への参加」とは結局、資源の再配分の要求であり、住民エゴの先鋭化に貢献したに過ぎないといったものだ。内実まで詳しくはわからないが、そうしたものとして受け取られてしまったことは確かだろう。革新自治体は低成長期における別様の「参加」を構想しきれなかったといえる。

80年代に入って低成長にともなう財政難は地域計画を福祉重視から福祉抑制へと向かわせる。社会福祉計画は後退し、また、高齢化にともなう福祉問題の複雑化、専門化に対しても行政の対応は鈍化していった。翻って民間活力、地域における自主的参加活動などが公的福祉の不在を補うものとして焦点化され育成されていく。ここで積極的に活用され始めるのが「福祉ボランティア」である。とくに高齢者介護の問題は高齢者を家族が抱えこむのではなく、地域でサポートする必要が説かれ対人の福祉サービスはボランティアがその任を担うようになる。

ボランティアとは、すなわち福祉の領域における活動として浸透していく。ボランティアに対する国のビジョンを確認してみる。1993年、厚生省は「国民の社会福祉に関する活動への参加の促進を図るための措置に関する基本的な方針」を発表。このなかで国が本格的にボランティアを振興していくことを明記している。また、同年、中央社会福祉審議会地域福祉専門分科会は「ボランティア活動の中長期的な振興方策について」をまとめボランティア活動や住民参加による福祉活動を重視する「参加型福祉社会」を前面に打ち出す。

ここでは「精神面の豊かさ」が重視され、「消費的な生活から、より何かを生み出し、積極的に暮らしを創造していくという個性的なライフスタイル」の追及が指向される。また、「社会の一員として何らかの形で社会のために役に立ちたい」と考える人々の出現を好意をもって迎えている。こういった福祉社会を実現するために次の事柄が求められることになる。つまり「個性の尊重」、「自分以外の他者や社会について関心と共感を持つような個人の生き方」、「社会参加や自己実現への意欲を満たす場」として「地域社会」、「福祉コミュニティ」における多様なボランティア活動がそれである。

ここからは次のことがいえる。つまり、国家による福祉役割の後退は所与のものとなり、個人の地域コミュニティへのボランティア的「参加」が「自己実現」の一環として称揚されることとなった。加えて、「参加」とは積極的に福祉を支える「自己実現」の主体のありうべき行為として定位されたのである。また、「自己実現」とは「社会のためになる」という意味で単なるエゴイズムからは区別されている。

自己実現という語彙と福祉ボランティアの相関が見えてきた。「自己実現」という言葉からは再帰的で存在証明に躍起になる自己の姿が浮かび上がる。

以上がボランティアと福祉ボランティアをめぐる言説であった。では、本稿の問題関心に照らし合わせると、どうか。ここでは、ボランティア活動の実践過程に目を向けることは前に述べた。他者との出会いを焦点とする意味で、福祉ボランティアのなかでも直接活動を分析対象としたい。ただ、ボランティアの対象者（高齢者、障害者、児童など）はここでは明確にしない。また、ボランティア活動の行為主体（学生、勤労者、主婦、高齢者など）を特定化することもしない。たとえば、世代、年齢、職業によってボランティア・イメージは異なることが予想されるが、本稿は世代による特徴を浮き彫りにすることを目的としているのではない。それから、施設、在宅、屋外など活動場所も当該のボランティアによって異なってくる。また、都市部と農村部でも差異が見えてくるかもしれない。しかし、本稿では活動場所、都市部・非都市部におけるボランティアといった特定化は行わない。本稿は言説分析をとおして抽象度の高い議論を進める。

注

- (1) セツルメントとは「トインビー・ホール(Toynbee Hall 1885年開設)に代表される、貧民の救済と教育をめざした、19世紀末の英国の社会事業・共助的学習運動の施設が、『社会的セツルメント』の原型である。」(見田宗介・栗原彬・田中義久編 1988『社会学事典』弘文堂、p546)
- (2) BBS運動、Big Brothers and Sistersの略で、非行少年の兄や姉役割としてかわり、更生を援助するもの。1904年にニューヨークのA・K・クールターの提唱によって始められ、わが国では1946年に京都の大学生によって始められた。1952年に法務省の支援もあり、日本BBS連盟が誕生している。(巡、早瀬編、1997、p24)
- (3) 類型化の方法としては、早稲田大学社会科学研究所都市研究部会(1996)第2章を参考にした。
- (4) 社会福祉6法が規定する施設をさす。社会福祉6法とは社会福祉サービスにかんする法律であり、児童福祉法、老人福祉法、身体障害者福祉法、精神薄弱者福祉法、生活保護法、母子及び寡婦福祉法からなる。たとえば、児童福祉法には、現在20種類の児童福祉施設(保育所、養護施設、乳児院、虚弱児施設、障害児関係施設、児童館、母子寮等)が規定されている。それらは社会福祉事業法の定めにより、第一種社会福祉事業としての施設と第二種社会福祉施設事業としての施設に分けられる。前者は主として、利用者(児童や保護者)の人権保障や生活保障のゆえに公的管理を必要とする性格をもつ施設であり、それに対して、後者は経営主体の創意と自由が尊重される施設である。それはさらに、行政機関による入所の措置を必要とする施設(入所型と通所型がある)と、利用者の自由意志によって利用できる施設とに分けることができる。(『福祉の仕事』、1994)

第3章 ボランティア・ガイドブックにみる語彙とボランティア・イメージ

外からのボランティアについて見てきた。また、1980年代後半から90年代初頭にかけて、ボランティアが積極的に振興されるようになる構図を確認した。この時期は同時にボランティアにかんする書物が多数、出版されていく。これらガイドブックの言説を収集、整理してボランティアを内から見ていく。

第1節 語彙をめぐる問題

たとえば、次のような語りがある。ある老年の女性は伴侶を失ったことを機に、ボランティアを始めた。しかし、それは内的、外的なさまざまな困難から長くは続かなかったのだという。

60代 女性 主婦 ホスピスボランティア

自分を癒すためのボランティアに参加しました。それは甘えではないか。本当の意味(本物)のボランティアではなかったのではないか。(2001b、pp.171 - 172)

「本当の意味のボランティア」とは何だろうか。おそらく、ボランティアの意味が過剰になりイメージがふくらんでいるのだ。私たちは社会が有しているイメージから自由ではありえない。ここからは言説を分析することで社会を考察する。

上述したようにここではボランティア・ガイドブックに見られるボランティアにかんする語彙を詳しく見ていく。そこから、ガイドブックが生成するボランティア・イメージを捉えようというのが目的である。

語彙を拾うとはつまり、人々の間で受け容れられ信じられている知識や思想を分析し、社会的状況の特徴を明らかにしようとする「知識社会学」のアプローチである。知識社会学の基本的な問いは、「ある特定の知識や思想を人々が信じ受け容れる社会的状況の特性は何か」および、「ある特定の知識は、人々に『正しい』知識として信じられ受け容れられることで、どのような社会的状況を形成する効果を発揮しているのか」という問いである。さらに、「ある特定の知識は人々に信じられることで、どのような方向に人々を動かしているのか」と問いかけることが可能になる。(森、2000、pp40 - 41)

また、社会学的な動機論に言及したC・W・ミルズの言説も参考にしたい。そこでは、「動機」は行為の前に行為者のなかに存在するものではなく、事後的に他者によって存在させられるものとして定位される。つまり、その行為になんらかの「意想外」なものを発見した他者がある動機を問う「問い」があってはじめて、動機を探して表現するという事態が生じるのだ。ミルズによれば「わからない」こと前にした他者がそれを「わかる」ようにするために発明するもの、それが「動機」である。(奥村、1998、pp166 - 167)

十分な、あるいは適切な動機とは、それが他者のものであると行為者のものであるとにかかわらず、行為やプログラムについて問う人を満足させうる動機のことである。ある状況に置かれた行為者や他の成員にとって、動機はひとつの合言葉として、社会的・言語的行為にかんする問いへの、疑問の余地のない解答として役立つ。

ミルズは、それぞれの社会において人々を満足させうる「動機の語彙」が存在するとする。それは行為者本人には「まったく知られていないものであること」もしばしばである。

こうして、「動機」は、その行為をした者を解明するてがかりであるよりも、その行為を「わかれう」とする他者＝「動機」としてその語彙をはりつけそれに満足する「社会」を明らかにする材料として読み直すことができる。

また、ボランティアの意味付けが過剰化していることについてイメージを確認することが目的でもある。言葉と現実の相関についてバーガーとluckmanは次のようにいう。

ことばは柔軟性に富んでいて、私の生活過程のなかで生起する極めてさまざまな経験を対象化することを可能にしてくれるのである。さらにまた、ことばはこれらの経験を類型化する。こうして、私はこれらの経験を私にとってだけでなく、私の周りの人びとにとっても意味をもつ、広範なカテゴリーのなかに含ませることができるようになる。ことばが経験を類型化するとき、それは同時にまた経験を匿名化する。というのも、類型化された経験は、原理的には、当のカテゴリーに該当する人であれば、だれによっても反復されうるからである。私の生活史上の経験は、客観的にも主観的にも現実的である、一般的な意味の秩序のなかへたえず包みこまれていくのである。

(Berger,Luckman、 pp60 - 61)

当該の現象は、ボランティアと呼ぶことで新しい意味をもち、他のものと比較され評価される。いったん使い始められると、何らかの共通性をもつと思われることが次々にボランティアと呼ばれ、ボランティアという言葉の意味は、拡張されていく。

たとえ、当事者たちは、ボランティアだとは思っていないくても、誰かがそれをボランティアと呼べば、他の多くのボランティアと同じものだと理解される。「ボランティア」と呼ぶことによって、ひとつひとつの関係を一般的な意味の枠のなかに閉じ込めてしまうことがある。そのような「過剰な意味付け」によって、ひとつひとつの具体的な活動と、それに対して外側から与えられる意味との間に隔たりができてしまうことがある。

上記の立場から、ここではボランティアにかんする語彙を拾いあげることによって、社会に浸透しているボランティア・イメージを描き出す。そしてその語彙がもつ概念がいかにふくらみを見せているかということをつえ、語彙分析を行う。

第2節 ボランティア・ガイドブックにみるボランティア・イメージ

1990年代から本年度(2003年)までに出版されたボランティアにかんする入門書、ガイドブック(以下、ガイドブック)に目をとおした。その定義は必ずしも明確ではないが、ボランティアを積極的に推進するコンテキストで叙述された一般書を含んでいる。可能な限り多数、多分野(福祉に限定されない)における図書を選択した。だが、現在出版されているボランティア関連の図書は膨大な数にのぼり、とてもすべてに目をとおすことはできなかった。

現在、流通しているボランティア・イメージの輪郭をはっきりさせることから始める。もっとも、それは過度のふくらみを見せており、捉えきくことは難しい。だが、ここでは、社会が生成するイメージ、あるいは私たちが共通に有しているイメージとして、可能なかぎり顕在化させ、それを提示してみたい。章末にはボランティア・ガイドブックに見られる語彙を表にまとめている。また、用いた文献も掲載している。随時、参考にさせていただきたい。それでは、ボランティアにかんする語彙を拾い上げ、イメージをひとつひとつひも解いていこう。

まず、ガイドブックが示す時代認識を見てみよう。そうすることで、私たちがどんな時代に生きているとされるのか、そこではどういった背景からボランティアが必要とされるようになったのか、また、現代社会においてそれがどのように位置付けられているのか、知ることができる。

ガイドブックの多くは現代社会を芳しく見ていない。否定的である。たとえば、「地域での活動が希薄になった」、「地域の連帯意識の欠如」、「社会は閉塞感に満ちている」などがそうだ。しかし、そんな現代にも希望は残されている。そこで、光が当てられるのがボランティアである。

今、社会は閉塞感に満ちています。それを打ち破っていくものこそボランティアです。言い換えれば、私たちが、いきいきと生きようとすれば私たちはボランティアになります。やりたいことをやれるとき、人はいきいきとするからです。ボランティアの世界を知ることは、私たちがいきいきと生きるためのハウ・ツーを学ぶことなのです。私たち自身がいきいきとし、周辺がいきいきとし、社会がいきいきとする……これがボランティアです(1999、pp.14 - 15)。

また、単に時代診断に終わるわけではなく、制度の面でもボランティアは必要だとされる。福祉を公的なセクターだけでまかなうのは不可能という議論からボランティアが活躍するのは当然というわけだ。

すなわち、現代社会が抱える諸問題を打開するもの、それがボランティア活動である。だ

から、ボランティアが増えなければならない。また、参加することによって、私たちは生きる喜びも受け取ることができる。それは「心の時代」には必要不可欠な要素だという。私たちは物の豊かさから、心の豊かさへと価値の基準を移し始めている。堀田力は現代を「『心の豊かさ』を求める時代」としたうえで、心の豊かさを実現するのは、企業や行政ではその役割を果たすことはできないとする。「心のサービスは心ある人々が提供する仕組みをつくるのが、はるかに適切である。その『心ある人々』が、家族とボランティアであり、家庭とNPO(非営利組織)が、心のサービスを提供する仕組みであるといえよう」(2001 a、p.5)という。

つまり、ボランティアは現代社会の抱える諸問題を明るみにし、それらを解決に向かわせるための活動である。また、それに参加することによって私たちはふだん得ることができない喜びを得ることができる。このような言説が多い。

ボランティアには欠くことのできない原則がある。それは、第2章で見たとおり、「ボランティアの三原則」である。つまり、自発性、無償性、公共性と呼ばれる概念だ。これらに加えて創造性、架橋性も見られる。だが、ボランティアを語るさいに用いられるものは圧倒的に上の三つである。

このうち、もっとも重要視されるのが自発性だ。自発的であるからこそボランティアとされる。章末の表を見てもわかるように、取り上げたすべてのガイドブックが自発性を第一の成分としてあげていた。自発的であるということは主体的であることになる。そして、主体的に参加しているからこそ、「だれでも」「どこでも」「どんなときでも」できる活動であるとされる。また、自発的イコール自分らしさの発露というふうにも考えられている。それは、「自分に合った活動を選ばないと、長続きしないし、いっしょに活動する人に迷惑をかける」からでもある。しかし、反対に、「活動をとおして、自分の知らなかった自分に気づくことや興味が広がることもたくさんある」(1995 b、p.23)という。

つまり、私たちは自分というものを大切にしなければならない。「自分が」「やりたい」という思いから始めることが肝心である。そうすれば、「たとえハードな作業でも苦にならずむしろ楽しみになるし、またいろいろ自分なりに工夫して、活動内容を発展させることもできる」(1999、p.115)。

同時に、まず体験することが第一とされる。理屈ではなく、参加してみないと始まらない。大切なことは行動することであり、正解を求めることではない。その過程では失敗やトラブルもあるかもしれないが、「反対に共感できたとき、達成したときの限りない喜びと分かちあえる体験が新しい可能性と喜びを提供してくれるに違いない」(1995 b、p.23)。だから、失敗を恐れてはいけないのだ。

つぎに無償性はどうか。この概念もまたボランティアを語るさいには欠かすことができない。金銭を受け取ることで自発性を尊重するボランティア本来の精神が失われてしまいがち

だ。金銭を受け取らないからこそ、ボランティア活動ならではの自主性や創造性が発揮できる。そして、お金を稼ぐことはできないが、それ以上の報酬 活動を通じて得られる精神的な喜びや達成感 を得ることができるという。

また、近年は有償ボランティアという考え方も広く受け入れられるようになってきている。「有償だからといってボランティアの価値は落ちない。ボランティアが必要とされる社会的課題、要請は質量ともに拡大している」(1999、p.30)。とくに、福祉ボランティアの場合、無償だと介護を受ける側に遠慮が出てしまい、うまくいかないこともあるという。(1999、p.29) このように、むしろ、有償であったほうが気兼ねなく関係が築けるとい議論もある。

公共性はどうか。しばしば言及されるのは、企業でも行政でもない、オルタナティブとしてのボランティアである。以前は「ボランティアは行政の手先になってはいけない」とよくきかれたが、「最近ではボランティアと行政の良好な関係がある。」のだという(1999、pp.105 - 106)。ボランティアと行政は協働しなければならない。

ボランティアはあくまでも行政とは異なる領域であり、プロのすき間を埋めることを意識したいですね。まさにこのやわらかな構造の社会を作るうえで不可欠なのだと私は考えています。私は、ボランティア活動を行う市民にこそ、排除差別される人のいない「柔構造の社会」を作る力があるのだと考えています。(2002、p.34)

しかし、公共という語彙は明確でない。むしろ、ボランティア・市民活動はその活動内容、活動方法、なんでも「あり」の懐の広い世界とされ、その領域は曖昧である。

つぎに、ボランティアに参加する人びとがどんなコミュニケーションをとっているかとされるのかに目を転じたい。まず、もっとも注目されるのがボランティアと対象者の関係性についてだ。従来、ボランティアは「奉仕」「善意」といった語彙と結びつけられてきた。しかし、近年、「してあげる」という発想は大きく転換しているという。たとえば、「善行」ではないという議論が見られる。このことは近年示されるようになってきた。「ボランティア活動とはいわゆる「善行」の枠に縛られない多様な活動が含まれるものなのだ。行政当局などに強く抗議する取り組みや政策提言のような現実の政治にかかわる活動も含め、要は自発的で社会的な広がりをもった取り組みは、すべてボランティア活動だといえる」(1997、p.13)。つまり、従来のボランティア・イメージから脱却し、新しい意味を付与し、刷新されたボランティア・イメージの形成を試みていることがわかる。

一方的に「してあげる」「してもらう」関係ではないのです。援助することで、援助する側も「自分とは違う状況の人と出会う」喜び、「わかり合い」「わかち合う」喜び、活

動するなかで「新しい自分を発見する」喜びが得られることを知っていただきたいですね。(2002、p.32)

とくに福祉ボランティアの場合、「してあげる」関係では長続きしない。だから、「共感」をもとにしなければならない。共感とはつまり、相手の立場に立って考えることであり、相手を思いやることだ。対等な人間関係のなかから、他者を理解し、また、自分を理解することができるようになる。このようなことからボランティアは「関係発見」のプロセスであるという。また、そこからは「つながっている」という意識が生まれる。先に見たように、現代社会は人間関係が希薄な社会である。だからこそ、「つながり」をもたらすボランティアが必要とされている。

そして、このような関係から得られるものは「生きがい」である。私たちは経済的安定は得られた。しかし、何か足りない。そうだ、生きがいがない。現代は仕事では自己実現が図れそうもない。また、上でみたような「つながっている」という意識も仕事からは得られない。

役割を果たす毎日に、少々疲れ気味の人も多いのでは？ボランティア活動をすることは、そんな日常生活に新しい風を吹き込んでくれます。あなたの人間関係、そして人生を豊かにする働きもあるのです。(2002、p.23)

つまり、仕事とは別様の自分をもつことがボランティアをすることで可能になる。「ボランティアには仕事や趣味では得られない充足感がある。未知の体験、仲間との出会い、達成感、感謝、尊厳、ボランティアには様々な喜びと感動がある」のだ。(2001b、p.15) だからこそ、とにもかくにも参加することが積極的に勧められている。

ボランティアにかんするイメージがいくらかはかたちをなしてきただろうか。ここで語彙を整理しておきたい。およそ次の四つの点に要約できる。

第一。従来のボランティア・イメージからの決別。つまり、「奉仕」や「善行」、「善意」といった語彙はあてはまらないというもの。これは大きな前提である。それから、ボランティア、イコール無償ではなく、有償ボランティアも認められてきている。このような文脈から、近年、新しいボランティア・イメージの構築が目指されている。よって、ボランティアは可能性を秘めた活動だとされる。現代社会は諸問題に満ちているが、それらを解決するためにはボランティアが注目されなければならない。ボランティアはしろうとであるけれどその新鮮な発想と工夫によって、行政や企業のもつ硬直性を破ることができるからだ。そこでは問題解決のための技術や問題意識が焦点化されるのではない。

第二。もっとも重要にされるのは、自発的であるということだ。ボランティアの価値はまさにそのことにある。そして、自発的であるからこそ、自分らしさや自己実現が達成できる。また、ボランティア活動は自発性や主体性を身につける機会として位置付けられてもいる。

第三。これは第一の点を補うものだが、新しいボランティア・イメージの下での語彙である。ボランティアの関係、つまり、する側/される側は対等。一方的な活動ではない。その根拠は、楽しさや生きがい、満足感が得られ、それこそが報酬となって相互作用的关系を築くことができるから。その意味で関係は対等なのだ。

第四。これは第三の点と関連する。上で見た報酬は他の行為、たとえば仕事ではけっして得られない別様の価値がある。あるいは趣味といった限定的なものではなく「社会」とかかっている。会社や家庭では自分らしさは発露できない。だから、それは個性の発揮を意味する。さらに、その価値は、ボランティアを始める前には思いも寄らなかったもの、参加、体験してみないとわからない。ボランティアに参加し、新しい世界を知り未知の人々と出会うことによって得られたものだ。そして、この別様の価値は私たちの心を十分、満たしてくれる。これがすなわち「生きがい」となる。

1 節で示したように知識社会学の立場から、これらガイドブックが生成している語彙は、すなわち社会が有しているボランティア・イメージであると考えることができる。語彙が現実を構成し、また現実が語彙を提供していく。ここで、確認したイメージに私たちは促されているのだろうか、あるいは縛られているのだろうか、あるいはまた、自由であるのだろうか。次章では福祉ボランティアの語りを参考にしながら自己とコミュニケーションを見ていく。

表 ボランティア・ガイドブックにみる語彙

ガイドブック発行年（参考資料参照）		92年	94年 a	94年 b	95年 a	95年 b	97年	99年	00年	01年 a	01年 b	02年	03年
内容													
現代社会について	人間関係・地域の関係が希薄に 社会は閉塞的 心の豊かさが求められる時代												
ボランティアについての評価	福祉は公的組織だけでは限界 市民活力の源泉 社会の閉塞状況を打破する 「奉土」「善行」ではない つながり・ネットワークになる まだ窮屈なイメージはある												
自己	自分に合った活動を選ぶべき 新しい自分を発見できる 自分なりのボランティア論を 自分らしさが大切 「あなたの思い」が源泉 自立を目指す 自己実現につながる 自分が好きになる 自分が変わる												
自発性・主体性	最も重要なのは自発性・主体性 自発的とは“いわれてもしない” こと。やめることもできる。 「自発性のパラドクス」 ^(*) を引き受ける 責任を背負う必要はある												
参加本位	参加するといろんな発見がある 理屈ではなく体験してみる												
参加者特性	人は誰もし人の役に立ちたい 問題に気づく感受性が必要												
ボランティアの内容	誰でもできる 内容は何でもあり(公序良俗に反しないかぎり)												

ガイドブック発行年（参考資料参照）		92年	94年 a	94年 b	95年 a	95年 b	97年	99年	00年	01年 a	01年 b	02年	03年
内容													
生きがい	楽しさ、感動、充実感がある 人生を豊かにする 「やりがい」がえられる 趣味・生きがいに												
コミュニケーション	多くの出会いがある 人間関係は対等 共感がボランティアの醍醐味 相手の立場に立って考える 他人のためにしたことが自分のためになる 評価は相手にゆだねる 相手のプライバシーは守る												
公共性・公平性	公共性とは普段の暮らしを「開く」こと 「公平性」は絶対の原則ではない (じつは平等を欠くもの)												
無償性	お金では得られないものが得られる 有償になっても価値は落ちない 無償のやり取りの中でこそ広がる関係がある(*2)												
創造性・先駆性													
行政との関係	行政とは協働関係 行政ではできないことができる・自由な意見がいえる 公的サービスにくらべると限界はある												
学習の機会	知識と技術を習得できる												

参考資料 ボランティア・ガイドブック

- 1992年 金子郁容『ボランティア もうひとつの情報社会』岩波書店
- 1994年 a 講談社編『ボランティア はじめの一步』講談社
- 1994年 b ボランティア・ワークショップ『ボランティアブック これから始めるあなたへ』ブロンズ新社
- 1995年 a 早瀬昇『元気印ボランティア入門』大阪ボランティア協会（1994年初版）
- 1995年 b 小山隆・谷口明弘・石田易司『福祉ボランティア』朱鷺書房
- 1997年 大阪ボランティア協会監修、巡静一、早瀬昇編『ボランティアの理論と実際』中央法規出版
- 1999年 鍋木孝昭『ボランティア入門ハンドブック』オーエス出版社
- 2000年 藤野信行『ボランティアのための福祉心理学』日本放送出版協会
- 2001年 a 岩波書店編集部編『ボランティアへの招待』岩波書店
- 2001年 b 森口秀志編『これがボランティアだ！』晶文社
- 2002年 安藤雄太監修『ボランティアまるごとガイド』ミネルヴァ書房
- 2003年 C O C O M O『あなたの夢を探す本。大人が元気になろう。生き生きと。』

表内の注

- (* 1) 「自発性のパラドクス」については本稿第 4 章において確認している。
- (* 2) 有償福祉サービスがもつ意義と無償活動の「本来的な性格」とを区別する必要性を説く文脈からの語彙。無償活動の「本来的な性格」とは以下の成分をさす。私たちは無償のやり取りを家族、友人とのあいだで日常的に行っている。だが、そこで、私たちは報酬を期待せずに相手に役立つと努め、また、交わされるであろう“感謝の念”や“共感”は金銭化されない。しかし、だからこそボランティアは深い意味をもち、無償のやり取りのあいだで広がる「関係」が生じるのだという。(1995 a、pp8.0 - 81)

第4章 福祉ボランティアにみる自己とコミュニケーション

第1章 ボランティアの両義性

ボランティア・イメージを見てきた。それは大きなふくらみをもっているとともに、いくつかの特徴が見られた。先に述べたように、このイメージをひも解いていくことがここでの課題である。とくに、ここからは福祉ボランティアに焦点をしばっていく。2章で詳しく見たように福祉ボランティアの類型軸でいう、活動の質的内容つまり行為者と受け手が直接的にかかわる面に注目する。ボランティア・イメージを検討していくとともに、福祉ボランティアの語りに耳を傾ける。ここではボランティアにかんするガイドブック、理論書、報告書などから、福祉ボランティアの語りを抽出している。加えて、じっさいに福祉ボランティア（とくに障害者関係）の方々に聞き取り調査を行った。そこから得た回答も随時、取り上げる⁽¹⁾。

私たちは再帰的で存在証明に躍起になるのであった。「私はこれでよかったのだろうか」という自分探しへの問いである。それは他者との相互作用をとおしてたえず繰り返される。これが本稿の課題設定である。では、私たちは福祉ボランティアというコミュニケーション世界において、どんなことを行っているのだろうか。前章にあげた言説を分析し、それをひとつひとつつぶさに見ていくことが本章の目的である。

二つの概念枠組み

最初に、ボランティア・イメージが伝える特性を示すことから始めたい。すなわち、ボランティアは「私的な活動」であり、また「社会的な活動」である。これは素朴ないい方かもしれないが、含意するところを述べると「私的」とは「自分のため」、「社会的」とは「他者のため」をさす。換言すれば、ボランティアは「自分のための活動」であり、また「他者のための活動」であるということになる。ボランティア・イメージはこうした両義的な側面を強調する。まず、このことを共有しておきたい。もう少し詳しく見てみよう。

3章で確認したとおり、ボランティア・イメージの特徴として、第一に従来のそれからの決別、新しいイメージの創造があった。つまり、ボランティアは「奉仕」でも「善行」でもなかった。では、なぜイメージの脱構築が図られるのか。理由は次のことがあげられる。従来のように、「奉仕」や「善意の行為」にされると、そこには「偽善」というレッテルが貼られることになる。また、善意の名のもとにそれが実践されているかぎり、「する側」の論理ばかりが称賛され、「される側」の意思が疎かにされてしまう可能性がある。そのために、旧来のイメージから脱却することが試みられる。そして、ボランティアは特別なものではなく日常的な活動であり、だから誰もが参加できる活動のだとされる。

「奉仕」でも「善行」でもない、このことを考えてみると次のことがいえる。つまり、他者のための行為ではない、自分のための行為だ、ということである。だが、たんに自分の利益を目的とした行為ではなかった。それは、家庭内の行為でも、また、仕事分野における行

為でもない。活動は社会性を帯びている。そうして、たんなるエゴイズムからは区別される。このことから、ボランティアは「自分のためだが他者のためでもある」といった両義的な側面が導き出される。すなわち、これが「私的な活動であり、また社会的な活動」の意味するところだ。

たとえば、高齢者施設でボランティアをする場合を想定してみる。その行為主体が学生であれば、その活動は福祉の現場を知るための実践であり、リタイアした老年男性であれば、じしんの健康のためである、といった言説が聞かれる。また、単純に楽しいからであり、生きる喜びを得ることができるからだ、といったことも聞かれ、それは「自分のための活動」だとされる。いっぽうで、高齢者福祉という「社会的な」枠組みのなかでの活動、といった位置付けがなされもする。このことがつまり、ボランティアが「私的な活動」であり、また「社会的な活動」であるゆえんだ。聞き取りから得た回答もそのような内容を含んでいる。

Uさん 24歳 男性 学生 障害者更生施設 継続10ヶ月 約月7回
20歳過ぎの利用者さんたちは同世代なんですよ。だから、ボランティアと利用者の関係ではなく 気を配るのは当然ですが 友人のような感じですね。友人に会いに来ている。

来るときは利用者さんにいつもと違う何かを届けたいというのはありますねえ。それは自分にとっても違う自分を発見できるんですよ。「奉仕」っていうと大袈裟なんですよ。そんなに考えてないですから。(聞き取りから)

Oさん 72歳 男性 障害者に水泳指導 継続19年 毎週1回
奉仕というほどでもない。自分の健康のためですよ。
ボランティアということとは違う気がするんですね。だから、ボランティアと呼ばれたくない。(聞き取りから)

Tさん 27歳 女性 会社員 障害者に水泳指導 継続3ヶ月 毎週1回
始める前は「障害者」という認識が残ると思っていたんですね。でも、いまはそれがするっと抜けました。つまり、苦手意識が消えていったんです。参加したら消えて行きました。ボランティアという感覚がなくなってきましたねえ。知り合いが目の前にいる、みたいな感じですね。(聞き取りから)

このような言説は多い。すなわち、それは「奉仕」ではないのだ。しかし、だからといって「利己的な」ものでもない。自分が充実を得られるとともに他者の役にもたっている。「私的」でありまた、「社会的」なのである。これがボランティアのもつ両義的な側面である。ここでは以上のようなボランティア・イメージを理論枠組みとして採用し、福祉ボランティアの様態を見ていく。このイメージのもとに、言説分析をし、私たちはどんなことを行って

いるのか、それを明らかにする。

その作業を可能にするために、さらにこのボランティアの両義的な側面を、二つに峻別する。第一に「私的な」活動としての側面、第二に「社会的な」活動としての側面である。それぞれの枠組みにあてはまるとされる言説をこのカテゴリーのもとに順次、自由に行き来しながら見ていく。第一の「私的な活動としてのボランティア」では、「私」の側に軸を置き、「自発性」という原則、あるいは「自分のため」「自己実現」といった言説を扱う。第二の「社会的な活動としてのボランティア」では「他者」との相互作用の側面に着目し、福祉ボランティアにおける「私」と「他者」の関係を見ていく。これらの枠組みから、ボランティアというイメージがもつ力、あるいはそのイメージのもとに行なわれるコミュニケーションがもつ力を検討する。

3章で整理したボランティア・イメージを確認しておこう。第一に、イメージの刷新があった。つまり、ボランティアは「私的な活動であり、また社会的な活動」というイメージである。このことはすでに見た。そして、これを前提に論述していく。第二に、「自発性」の強調があった。第三に、関係は「対等」とであるとされた。第四に、ボランティア活動をとおしてさまざまな価値が付与されていることがあげられた。これらにまつわる言説を順次見ていく。

「私的な活動としてのボランティア」

では、はじめに「私的な活動としてのボランティア」を枠として福祉ボランティアの様態を見ていくことにしよう。これは「ボランティアは自分のための活動」といった語彙に端的に現れている。たとえば、ガイドブックには「自分が変わる」「自分に合った活動を」「自分らしさ、新しい自分を発見できる」「自分なりのボランティアを」「自己実現」「自分が好きになる」などの語彙が散見された。つまり、ボランティアは「自分のためになる」ということにその価値が見出されていた。

このことを本稿の問題意識のもとに置くならば、どういったことがいえるだろうか。「自分」すなわち、「私」は再帰的で存在証明に躍起になるのだった。たえず、自分を吟味し、新しい自分を形成しようとする。それは、裏を返せば、不安定な、不確かな「私」が存在することを意味した。不安定であるから確固とした「私」を求める。「自分」というものを実感したい。自分探しである。そこで、「私」はボランティア活動に参加することになる。ボランティアは「自分のため」になるのだった。活動を通じて、自分の価値をたくさん発見する。「自分の知らなかった自分」、「自分らしい自分」、「自分を好きな自分」など。そう、「私って素晴らしい」。こうして、「確かな私」が現れてくる。ボランティアに参加するのはこのためだ。

ボランティアの語りを見てみよう。Oさん(女性)は大学生活の4年間、ボランティア活動に参加した。それはキャンプカウンセラーと呼ばれるもので、キャンプ期間中はキャン

プ場来場者を補助し、キャンプオフ期間は研修や次回キャンプの準備などにあたったという (1995 b、 p.65)。

(ボランティア活動は) 4年間の大学生活の大半を占めました。しかし、損をしたとは思いません。その時間の分、多くの人と出会い、中でも障害をもった子どもたちとの出会いは印象深いものでした。自分には関係ないことだという今までの考えが変わったように思います。「障害者」とひとくくりにしていた彼らを、個人としてみるができるようになり、言語障害の子どもと目で話すことができました。昼は無表情な子が夜のテントではおしゃべりがとまらない、そんなふれあいをとおして私は与えた時間以上のものを与えられたと思いました。

途中でやめることもできたけれど、自分の意志で選んだ活動だからこそ続けることができたのだと思います。

Oさんのボランティア体験も「確かな私」を獲得する過程として見ることができよう。ここでもっとも注目したいのは、「自分の意志で選んだ」という語彙である。この語りからは自発的な自己のほかに若干の自己犠牲感も見とれる。つまり、大学4年間もボランティア活動に自分を捧げてしまった、これでほんとうによかったのだろうか。そういった疑問がないわけではないようだ。だが、それを打ち消すように自らの自発性を根拠にボランティアに対して肯定的な評価を導き出している。ボランティアは他の誰から強制されたわけでもない「選んだのは私」なのだと。だから継続することができた。次のような語りも聞かれる。

Nさん 60代 女性 高齢者介護

ボランティアは人に勧められてやることではない。自らの意志で行動を起こすもの。だから、楽しいのだ。奉仕ではなく、人の役に立つことでもない。人と人との触れ合いの場、自分自身を元気づけるところ。これがわかった今の私は、心の底から人と人とのつながりを楽しんでいる (2001 a、 p.208)。

これはガイドブックに見られた「自分で選んだ活動だからハードな作業も苦にならず楽しむことができる」、とか「自分のやりたい思いがあるから活動内容を発展させることができる」といったイメージとも重なる。

上の二つの語りからもわかるように、「確かな私」のもっとも根拠になるものは個人の「自発性」である。「自発的」とは、「自分が選んだ」、「自分の意思で選んだ」ということを意味する。この「選んだ」という語彙に着目してみよう。それは、第一に、自分じしんの判断のもとに、自らの意思で「選んだ」ということがいえる。選んだ主体は私であるということ。第二に、さまざまある選択肢のなかから任意の活動を「選んだ」ということがいえる。この場合、仕事としてではなく、また、単なる趣味としてではなくボランティアに価値を見出し

て選んだということ。さらに、ボランティアのなかでもさまざまな内容の活動があるが、そのなかの一つを選択したということだ。

語りのなかに「自分の意志」とあったが、「自発的」に「私が選んだ」からこそ自己肯定感が得られる。このことは、再帰的＝不確かだった私を確固たるものにしてくれる。そして、再帰的であること、つまり 自分探し に小休止が打たれる。「確かな私」を実感するからだ。このように、自発的な活動であるボランティアは私たちに「生きる確かさ」を与えてくれることになる。だから、ボランティアは推奨される。自発性が強調され、自己に価値が置かれるのはこのためである。これが「私的＝自分のため」の活動としてのボランティアである。その根拠になるもの、それは「自分で選んだ」ということであった。

「私的な活動としてのボランティア」枠組みのもと、「自発的な自己」について見てきた。だが、「確かな私」の構成を可能にした背景を明らかにするには、この成分を確認しただけでは不十分である。ボランティアは自分のためだけの活動ではなかった。「確かな私」を実感できたのは「他者」の存在があったからこそである。最初の O さんであれば障害者と、次の N さんであれば高齢者との関係があった。そして、そうした他者に承認されることで「確かな私」が現れたのだ。それは再帰性に小休止を打つことを意味した。「確かな私」＝再帰性の切断とは、つまり他者からの承認をとおして得られた存在証明のプロセスであったのだ。次に、他者との関係に目を転じなければならない。ここからは「社会的な活動としてのボランティア」を見ていく。

「社会的な活動としてのボランティア」

ここでいう「社会的」の含意は「他者のため」であった。つまり、自分の行為が他者の役に立つ、他者に肯定的な影響を与える、といったことである。たとえば、次のような語りがある。

女性 主婦 朗読ボランティア

利用者のはずんだ声をきくと、私たちの活動がひとりの人の生活を明るくしているのだとうれしくなります。(1995b、p.77)

60代 女性 ボランティア・グループ主宰 高齢者デイサービス

地域の高齢者の方々がはつらつとしていくのを見るにつけ、『一人ひとりが自分らしく人生を全うできる社会』に近づくプロセスに、自分たちの活動が関与しているのだなあと、実感しています。そのことがとてもうれしい。活動するうえで、小さいことで疲れてしまうことはしょっちゅうです。でも、おもしろいからついやってしまう。悲壮感は好きじゃないから、おもしろがりながらやっていますよ。(2002、p.29)

福祉ボランティアの世界では「介助してあげる側/介助してもらう側」の関係が成り立つように思う。しかし、そうではない。「他者のため」という語彙は「ボランティアをしてあげる」といった関係性には回収されず、また、一方的な「奉仕」や「善行」ではなかった。関係は「対等」なのだ。このことがボランティアを「社会的な活動」たらしめる。だから、「対等な関係」という成分はボランティアの必要条件ということになる。ガイドブックに見られた語彙を確認すると、「共感がボランティアの醍醐味」であるとか、「相手の立場に立って考える」といったものがあった。これらも同様に「対等な」関係を強調していると考えられる。たとえば、高齢者介護を専門とする NPO 法人にかかわる Y さん（53 歳 女性）からは次のような言葉が出る（2001 b、p.230）。

何かしてさしあげるといふ発想はおこがましいですよ。今日は健康だし、時間的に余裕もあるから、たまたま助けてあげる側にいられるけど、いつ助けられる側にまわるかわかりませんし、助けられている一方に見える人も、どこかで誰かを助けているものなのです。

ところで、「対等」とはどういうことか。ボランティア・イメージはこのことを明確には示していないように思うが、ここでは、主体と主体の相互作用的な関係としておこう。私と他者がともに「主体」として現れる。そのことはつまり、「してあげる = 主体」と「してもらう = 客体」の関係ではないことを意味する。

ある民間企業に勤務する M さん（53 歳、男性）の語りを聞いてみよう（2001、pp.34 - 40）。会社の「ボランティア休職制度」を利用し、1 年間、障害者施設やその関連施設でボランティア活動に参加したのだという。復職後も仕事の合間や休日を利用して「企業人ボランティア」を実践している。

ボランティアに出会うまでの私は、まさに会社と自宅を往復するだけの「振り子人生」でした。（中略）

（ボランティア協会を偶然）覗いてみたら障害者の人たちやボランティアらしき人たちが、ワイワイと会議をしている。その彼らの様子を見たときに「ワーツ、活きているなあー」と思ったんですね。それまでの私はボランティアなんかまったく興味がなくて、「ボランティアなんて、よくやるよな」という感じしか持っていませんでした。自分とはほど遠い世界（笑）。

その私がたまたま通りかかった場所に、フラッと立ち寄ったのは、おそらくそれまでの「振り子人生」に空しさを感じていたからだと思います。

これをきっかけにボランティアを知った M さんは、この後、ボランティア 仕事以外 の世界にのめりこんでいく。そして、迷ったあげく、会社の「ボランティア休職制度」に申請

する。休職期間中は精神障害の共同作業所に 38 日、身体障害者施設に 73 日、高齢者のデイケア施設に 36 日、ほか企業人のためのボランティア講座の企画・運営などで、計 246 日 + の活動をしたという。

私はなにしろそれまでが「振り子人生」でしたから、なるべく幅広く、いろいろなことを経験したかったんです。この 1 年間でたくさんの経験をして、これからのボランティア活動、さらには今後の人生の土台づくりをしたいと思ったんです。多くの人が復職すると同時にボランティアをやめてしまうのですが、私にとってボランティアというのは、あくまでも生き方の問題なんです。ですから、私は今でもボランティア活動をつづけていますし、これからもやりつづけると思います。

身体障害者の施設に行ったときに、重度の人たちですからみなさん二つ以上の障害を持っているんですね。でもそれをかいくぐって生きようとするたくましさというか、生きようと執念みたいなものを教えてもらいました。彼らはごはんを食べるのも人の手を借りなければならぬし、やっとな飲み込んでいます。なのに明るいですね。生きるしたたかさを存分に叩き込まれましたね。(中略)

私は「苦労」とか「苦しい」なんて思ったことがないんです。私が鈍いのかなあ(笑)。もちろん、ボランティアに行っただけのいいことをいわれたこともあります。たとえば、障害者の人から「あんたとは一緒にやりたくない。帰ってくれ!」とか「もう僕の前に姿を現さないでくれ!」と言われたり。でもそれは、障害を持っている人ならときにひがみっぽくなることもあるわけで、当たり前なことなんですよね。そういう言葉で表現することもあるということがわかれば、ショックでも何でもない。

この M さんの語りからは他者が主体として現れているのがわかる。対象は障害者であり、被介助者であるはずなのだが、「介助をしてもらう = 客体」ではなく主体として関係をとっている。つまり「対等」なのである。そして、この「主体としての他者」と出会うことによって「別様の人生」「生きがい」が開けてきたのだという。ボランティアに出会ったことで人生が変化し、また、ボランティアは「生き方の問題」なのだという。

この語りを聞くかぎり「社会的な活動」、すなわち「他者のための活動」が「自分のため」になっている。先に引いた女性二人の語りにもあったように、「自分たち」の活動が「他者」に肯定的な影響を及ぼすことは「私」の喜びになる。他者に認められた「私」、他者に評価された「私」。ここでも他者からの承認によって存在証明を果たした自己の姿がある。

ふたたび「私的な活動としてのボランティア」へ

こうして「社会的な活動」からふたたび「私」が現れてくる。もう一度、「私的な活動としてのボランティア」に目を移してみよう。「私」は「他者のため」に活動したことで「充

実感」や「楽しさ」、「感動」、「生きがい」といった「非物質的な報酬」を得ることができる。すなわち、「他者からの承認」である。そのことが自己の存在証明になり、また、再帰的であること＝自分探しの切断を可能にする。「社会的＝他者のための活動」から「私的＝自分のための活動」へ。はじめに見たように、再帰的＝不確かだった私は「こんなに充実した活動」を「自発的」に「自分で選んだ」ことによって「私」を確固たるものにする。

Aさん 女性 20歳 学生 障害者更生施設 継続4年 不定期

人との接触を嫌う自閉症の方が、突然話し掛けてきたことは嬉しかったですね。それから、「ありがとう」といってくれたこととか笑顔を見たとき。あと、ふだん、自分には関心を示さない人が私の顔とか手とかを触ってきたときも嬉しいなと思います。

(聞き取りから)

Uさん 24歳 男性 学生 障害者更生施設 継続10ヶ月 約月7回

来るからにはカッコつけたこと(施設のため、利用者のため)も考えますが、「行って楽しい」「充実したなあ」と思えるのが大きいですね。(聞き取りから)

ボランティアを「私的な活動」であり、また「社会的な活動」として捉えることで、「再帰的＝不確かな私」が「確かな私」を獲得するプロセスを見てきた。当該の活動について、「私的」だとしていたことが「社会的」な性質を帯び始め、「社会的」だとしていたことが「私的」な性質を帯び始める。換言すれば、自分のためにしていたことが他者のためになり、他者のためにしていたことが自分のためになること。「自分のため」であり、「他者のため」でもある両義性。まさに、ボランティアのその性質によって「私」は「他者」から承認を得ることができ、存在証明が可能になり、再帰的であることに小休止を打つのである。そして、「生きることの確かさ」を実感する。ボランティアの両義性を介した循環運動は続くことになる。

第2節 福祉ボランティアというコミュニケーションがはらむ暴力

こうして、ボランティア活動に熱心に取り組む人びとが現れ、活発化が進む。人はボランティアをとおして「生きる確かさ」を知る。そして、自分探しに一息を入れる。だが、私たちはたえず再帰的で存在証明に躍起なる。「私はこれでよかったのだろうか」という自分探しへの問いは続く。だから、人はボランティアに向かうことになる。ボランティアはさらに人をボランティアに加熱させることになる。

私たちは再帰的であることから逃れることはできない。ボランティアをとおして存在証明をめぐるゲームが陸続と繰り返されていくことになる。このことについて考えなければならぬ。私たちが再帰的で存在証明に躍起になることからくる危うさ、そしてまたボランティ

アが「私的な活動」であり、また「社会的な活動」であることからくる危うさについて。ここではそのことを注意深く見ていく。

もう少し「私的な活動」と「社会的な活動」という枠組みにこだわってみよう。このことがボランティアの特質であり、それが醍醐味とされた。しかし、これは容易に崩れる危険性をはらんでいるように思われる。すなわち、両義的であるまさにそのことによって両方の側面が反転する可能性があるのだ。

つまりこういうことだ。「自分のため＝存在証明」ということが「利己的な快樂」になり、「他者のため＝役に立ちたい」ということが「自分をすり減らすこと」になる。上で見てきたことに従うならば、「私的」であることは「社会的」であることに接続し、「社会的」であることは「私的」であることに接続するのだった。それがボランティアの特性とされた。しかし、そうではない状況が起こりうる。「私的」であることが「社会的」であることに接続しない場合と、「社会的」であることが「私的」であることに接続しない場合である。

ボランティアをめぐる言説のなかにもこのことは語られている。そこで見られる語彙を借りるならば、「利己的な快樂」とは「自己満足」であり、「自分をすり減らすこと」とは「自己犠牲」である。ここでは、「自分のため＝私的」であったことが「他者のため＝社会的」であることにつながらず、「利己的な快樂＝自己満足」になってしまう。また、「他者のため＝社会的」であったことが「自分のため＝私的」であることにつながらず、「自分をすり減らすこと＝自己犠牲」になってしまう。そして、「自己満足」は他者を苦しめることになり、「自己犠牲」は自分を苦しめることになる。ボランティアが両義的であるそのことによってこうした状況が起こりうる。

このことは私たちが再帰的で存在証明に躍起になるかぎりにおいて、生じることのように思われる。「不確かな私」は「確かな私」を求める。つまり、自分探しに夢中になる。こうして、私たちは「確かな私」を獲得するために「他者」を利用する。また、私たちは「確かな私」を得るために「他者」に身を尽くす。じつは前節で見てきたこともこれと同じことがいえる。そして、このことが他者を苦しめ、あるいは自分を苦しめる可能性をはらんでいたのだ。

もう一度「私的な活動としてのボランティア」という枠組みを用いてみよう。再帰的で存在証明に躍起になる「私」は、「他者」の役に立ち、「他者」に肯定的な影響を与えることで、「確かな私」を獲得しようと努める。存在証明が果たされると「私って素晴らしい！」となる。その意味で「自分のため＝私的」である活動なのだった。しかし、そこで、「私的な活動」としての側面が強すぎると、「私」は「主体」として現れ、「他者」は「客体」として現れることになる。ここからは「他者」を存在証明のために利用する「私」の姿が見える。これにたいして、都合のいいボランティアといういわれ方がある。する側だけの思い込みによる行為というわけだ。

「ボランティアさんが施設に来る日は、時間が過ぎていくのを、ただ待っていました。

彼らは自分の意思で来るけれど、私たちは拒めないのですから」特に深刻なのは、ボランティアは、本当に必要な時にアテにできないことだ。ボランティア三原則というものがある。自発性、連帯性、無償性のことで、正統派のボランティアはこれを誇りにしている。しかし、これも、ボランティアされる側に言わせると「好きな時に現れて(自発性)、役にたきたいといい(連帯性)、見返りを要求しない代わりに誇りを傷つける(無償性)三原則」になりかねないという。(原田、2000、p.73)

今度は、「社会的な活動としてのボランティア」の枠組みを用いよう。ここでも、再帰的で存在証明に躍起になる「私」の姿がある。ただ、「私」がもっとも望むことは、「他者」の役に立ち、「他者」に肯定的な影響を与えることである。そして、そのことが結果的に「確かな私」を獲得することになるのだった。だが、「他者のため=社会的」な側面が過剰であると、「私」は「客体」として現れ、「他者」が「主体」として現れることになる。他者に呑みこまれてしまう感じとでもいおうか。「他者」に身を尽くそうとするあまり、「私」が消し去られてしまう。そこではけっして「確かな私」を獲得することはできない。

Aさん(女性)というボランティアの語りに耳を傾けてみよう。阪神淡路大震災のとき県外避難者支援のため、電話で情報提供を行う活動にかかわった。そこで、被災者の愚痴や不満をひとりで1時間でも2時間でも聞いていたのだという。

避難所にいる被災者に比べて支援の手が差し伸べられにくい状況にあった県外避難者のために、「自分が聞かなくては、自分しかいない。」という義務感で受話器を取っていました。そのうちに「変な言動をする」と言われるようになり、髪が抜け始めたんです。でも、全部抜けてしまっても、それでも、カツラをかぶってまだ電話を取っていました。強制的に活動を停止させられた後、家の鏡で自分の姿を見てはじめて、自分がかawaiiそうになって泣きました。そして、被災者に対する憎しみを抱くようになったのです。(中略)燃え尽きた人の心境は「やらなければよかった」ということではないでしょうか。挫折感や無力感、途中でやめてしまった自責の念、ボランティア活動への嫌悪感ではないでしょうか。(森口、2001、p.185)

同じような声が聞かれる。

30代 女性 高齢者介護 Tさん

私などでよろしければと毎回毎回、一生懸命に話をおききします。規定時間内にはとても終わりません。サービス残業を終え、帰り道ではどっと疲れが出ます。それを毎週、続けてゆくうちに、そのおばあさんの重荷が、苦しみが、私にも乗り移ってきましてした。

二年の内に一度病気になって、ひと月半、活動を休みました。そのころは、担当ケー

スのすべての人生の苦しみが私にのしかかってくるように感じられ、強いストレスでした。私は自分を守りながら他人の援助をしなければならなかったのに、コントロールがうまくできず、結局休んで利用者に迷惑をかけてしまったのです。(2001、p.210、214)

「他者は『主体』なのである」という認識が想起される(奥村、1998、pp36 - 38)。奥村はレインの分析を引用しながら「他者から承認されることが重要になればなるほど、承認されることがいっそう大きな不安を生む」ことを示している。つまり、私の存在証明が他者の承認に依存するかぎりにおいて、私の存在は他者しだいであることを意味する。ここでは他者が「主体」であり、私が「客体」の位置に置かれる。「私のアイデンティティは他者という『主体』に『呑み込まれる』のではないか」。

私たちは再帰的で存在証明に躍起になるのだった。そのことが私たちをボランティアに向かわせ、また、ボランティアを加熱させる。だが、このように見てくると、ボランティア・イメージのもとに行なわれるコミュニケーションは暴力性をはらんでいることが露見されてきた。そして、イメージには偏りがあることが見えてくる。「私的な活動」であり、また「社会的な活動」といった両義的な側面は後退する。ここで採用してきた概念枠組みが崩れ、「私的」と「社会的」に離反することになってしまう。

加えて、これまで肯定的に強調されてきた語彙への疑義が出てくる。第一に「自発的」という語彙への疑問。自発的に選んだことが他者を苦しめ、あるいは自分じしんを苦しめる可能性をはらんでいること。第二に「対等」という語彙への疑問。必ずしも関係は主体と主体にはならず、主体と客体が互いに入れ替わりすること。次に、これらの問いを考察する。

第3節 福祉ボランティアに内在する問題

「自発的な」自己

では、ここからはボランティア、とくに福祉ボランティアが内在する問題を考えていきたい。第一に「自発性」について再考する。自発性という概念はやっかいである。ボランティア・イメージのもとでは、あるねじれが生じているように思われる。そして、そのことが私たちを振りまわしている。つまり、自発的だからこそ、あるいはそのことが過度に強調されるために行為や関係が閉ざされていく。

金子郁容(1992)は「自発的」に参加することからくるボランティアの脆弱性を「自発性のパラドクス」とよんだ。つまり、自発的(自分ですすんでとった行動)であるがゆえにじしんが不安定な立場に立たされることをいう。このように、金子ほか、ガイドブックにみられる言説も自発性概念には注意を払っている。だが、それらの言説は自発的あることの脆弱性が、自己と他者の関係を開くものとして肯定的に叙述している。

そうだろうか。むしろ、行為や関係を閉ざすことのほうが多いように思われる。いくつか考えられることがある。第一、自発的であることは義務化する恐れをもつ。たとえば、ある

困難に遭遇したとき、ボランティアは自発的な活動であるから、いつでも困難を回避し、ボランティアをやめることができるように思われる。しかし、そうはいかない。「自分で選んだ」活動だからこそ続けなければならないのだ。それを選んだのは「私」なのだった。そうであるならば安逸に放棄できない。前節では「自分で選んだこと」に価値が置かれた。自分が「選んだ」からこそ「確かな私」が獲得できるのだと。しかし、このことは危うさを内包していたことになる。自分で選んでしまったから不安定なのだ。

第二。自発的ということはどこまでしていいのか判断がつかない。自発的とは自分の意思で選んだことをいった。であるならば、ボランティア活動におけるすべての行為は自分の意思で行わなければならない。聞き取りからでも同様の回答があった。

Aさん 女性 20歳 学生 障害者更生施設 継続4年 不定期

ボランティアは幅広いですよ。一度やっても、ずっとやってもボランティアじゃないですか。だから、どこまでやっていいのかわからなくなるんですよ。キャンプボランティアはやらせている感がある。コピーとかとってて、それは“仕事”って感じでした。責任を押し付けられていたような。そのことで悩みました。押し付けられたとき、ボランティア、アルバイトのどちらを優先させるかで。そのときはけっきょくどちらもやりましたね。でも、それは苦しかったです。そのときから、自分が楽しくないといけないうようになりましてねえ。いまはそれをいちばん大切にしています。苦しさは相手に伝わるんですよ。(聞き取りから)

これらのことから、次の二つのことがいえるのではないか。第一に、偶有性である。それは「必然性の否定と不可能性の否定によって定義されるような様相」(大澤、1996、p174)をいう。「誰から頼まれたわけでもない」、あるいは「他でもありえた」にもかかわらず、なぜ私はこれを選んだのか。そこに「私」が「自発的」に「選んだ」ことの根拠はない。すなわち、「私が選んだ」ことは不確かなことなのである。

第二に、この偶有性を隠蔽するかのよう自発性が促される。「自発的になりなさい」と。ここで、おかしいことに気がつく。自発的になれ、と命令されているのではない。ボランティアは自発的な行為であるはずなのに、自発的であれ、と自発性が強いられている。ボランティアじたいが、自発的でなければならない。ここにボランティア・イメージがつくりだす「自発的になりなさいのパラドクス」⁽²⁾が見てとれる。つまり私たちは「自発的にボランティアに参加しなさい」といわれるかぎり「自発的」にはなれない。そういわれた時点で、身体を硬直させるしかない⁽³⁾。たとえば、先のAさんは自分の自発性に従おうとした。すると、ボランティアをやめてアルバイトをすることになる。けれど、「自発的にボランティアをしなさい」と促される。それで、仕方がなくボランティアをする。しかし、それでは自分の自発性に従ったことにはならない。だから、ボランティアとアルバイトのはざままで苦悩することになった。

すなわち、「ボランティア」という語彙じたいがパラドキシカルなのだ。自発的でなければならぬという言説が自発的であることを不可能にする。つまり、自発性を自己に回収することはできない。自己は再帰的なのであった。その意味でつねに、「他でもありえたこと」すなわち、不確定性、偶有性をはらんでいる。だから、自発的であることが「確かな私」につながることはない。

考えてみれば、私たちはつねひごろ、自発性に従っているわけではない。自分の意思よりも他者との関係や状況の力に動かされていることが多い。聞き取りからでもそのような回答を得た。

Mさん 女性 38歳 教員 障害者ボランティア 継続14年 月1回
なんとなくまあ「惰性」でやってる感じですけどね。(聞き取りから)

Yさん 男性 55歳 会社員 障害者に水泳指導 継続22年 週1回
現在まで続けているのは正直、なりゆきみたいなのところがあって。それは正直なところ
継続して続ける人が他にいないんですよ。(聞き取りから)

両者は共通してボランティアの継続年数が長い。ボランティア・イメージが伝えるような、自分に価値を求める志向はあまり見られない。上の語りを聞くかぎり、この二人は存在証明に躍起になる「私」からは少し距離がある。「自発性」だとか「自分らしさ」から離れることによって、自分探し ゲームからいくぶん自由になった「私」の姿がある。

ここからは次のことがいえる。すなわち、ボランティアが自発的な行為だとされ、自発性が強調されることによって、「私たち」は自己の内に、「他でもありえたこと」を求め続けることになってしまう。そして、そのことはボランティアを加熱させ、ときに他者を、ときに自分じしんを傷つける暴力をもってしまうことになる。

「対等な」コミュニケーション

次に「対等」という語彙を再考してみる。第一に、福祉ボランティアにおける介助者と被介助者の関係は原理的に対等ではない。非対称的な関係である。医療や福祉や教育などの分野では、生命や生活や健康を委ねられた側が圧倒的な権力をもつのは事実であろう(石川、2000、p.47)。つまり、目に見えて権力を有することはないが、福祉ボランティアでは「介助する側」が優位な立場に立つ。

また、福祉ボランティアは感情労働であるといえる⁽⁴⁾。「感情労働」とは「職務内容の一部として適切な感情状態や感情表現を作り出すためになされる感情管理」である。「感情管理」とは「自己の感情を適切なものへと『変異』させるために用いられる技術」であった。このことを鑑みると「対等」という概念を志向することは、「感情管理」である。原理的に「対等」ではないのだが、ボランティア・イメージに相応しい感情に操作する。感情労働は

リスクをとめない、それは「一心不乱に仕事に貢献し、そのため燃え尽きて感情麻痺を起こしてしまう危険」(前掲書、p.43)がある。このことから、「『私』が他者に呑みこまれてしまう」状況が生まれ、「燃え尽きて」しまった事例を上で見た。

だが、反省的にボランティアに参加したことがある者なら、このようなボランティアの立場性に苦悩した体験をもつのだという。つまり、優位な立場に立つ自分が劣位な立場にある者を助けるということ。そうした立場の不平等性からくる苦しみがある(小澤、2001、pp.238 - 240)⁽⁵⁾。この「健常者」と「社会的弱者」という認識フレームを超えようとする意思から、「対等」という概念が導き出される。すなわち、理念としての「対等」ということになる。

少し、意地の悪い方をすれば、この「対等」概念は「ボランティアをする側」の理想にすぎないといえる。真の他者性、他者は違うということを隠蔽していることになる。

本章で見てきたことは私たちを振りまわすコミュニケーションの力である。それは、福祉ボランティアというコミュニケーションにおいても顕在化する。ここからは、ケアという行為の困難さが浮かび上がってくる。つまり、人は人を支えることが可能なのか。ケアという関係性を考えなければならない。歩みをいっば進めよう。

注

- (1) 杉並区内で活動する個人、団体を対象に聞き取り(自由面接法による)を行った。阿佐ヶ谷生活園の利用者・職員・ボランティアの方々、サンデー親子水泳教室のボランティアの方々、ふうせんの会のボランティアの方々にご協力いただいた。阿佐ヶ谷生活園はいたる心身発達センターが運営する障害者更生施設、サンデー親子水泳教室は障害者とボランティアがともに水泳を楽しむ団体、ふうせんの会は障害者とその父母とボランティアがともに余暇活動を行う団体である。また、杉並NPO・ボランティア活動推進センターの疋田恵子さんにもお世話になった。以上の方々に感謝申し上げたい。
- (2) 長谷正人「遊戯としてのコミュニケーション」大澤真幸編『社会学のすすめ』(筑摩書房、1996)および、長谷(1991)を参考にした。

「自発的になりなさいのパラドクス」とは次のようなコミュニケーションから例証される。宿題をやりたくないのに、忘れた振りをしてテレビを見ている子供がいる。母親は「宿題をやってから見なさい」と叱る。そこで、子供はしぶしぶと勉強を始める。母親はさらにこう付け加える。「どうして他人に言われてからでないといけないの。そんなに嫌々やったって意味ないわ。自分から進んでやらなきゃ駄目でしょ」。このように命じられた子供は、実は、母親のこの命令(自発的に宿題をきなさい)に従うことは不可能なのだ。このまま宿題を続けても、それは母親の命令に従うだけであっ

て「自発的な」行為ではないのだから、命令に従っていることにはならない。かといって、「自発的」になるために宿題を放棄しても、やはり「宿題をしろ」という命令に従うことにはならない。こうして、この子供は宿題を「する」か「しないか」という二つしかない選択肢のどちらをとることも許されない、二重に(double)束縛(bind)された状態に陥ってしまう。これをダブル・バインド状況と呼ぶ。(長谷、1996、pp.51 - 52)

- (3) ボランティアにかんする語彙をめぐっては本文でも述べた「自発性のパラドクス」(金子、1992) がしばしば取り上げられるが、これは、ここでいうボランティアの「自発性になりなさいのパラドクス」とはコンテキストが異なると思われるので、峻別しておきたい。
- (4) ホックシールドを代表にする感情社会学は、感情経験を構築する社会的実践 = 感情文化を研究対象とする。感情とは社会的・文化的に構築されるものであり、制度の外側にある自然なものなどではなく、制度そのものであるというのが感情社会学による感情の捉え方である。逸脱的と見なされる感情は社会的・主体的統制を受けて同調的と見なされるものへと改められる。適切な感情が創出され不適切な感情は消去される。感情社会学はそうした統制を「感情管理」と呼ぶ。(石川、2000、p.58)
- (5) ボランティアの立場性についてはロバート・コリンズ(1996) や原田隆司(2000) が自らの体験から考察を加えている。本稿は彼らの議論から多くの示唆をえていることを記しておきたい。

終章 自分探し と人が人を支えること

ケアという関係性

福祉ボランティアにかんする言説をめぐって、抽象度の高い議論を展開してきた。ここでもそれは変わらない。前章で確認したことは、つまり、ケアという関係性についてであった。ケアするとはどういうことか。また、望ましいありようとはどんなものか。ここでは私見を述べ、まとめとしたい。

前章で見たように、他者がさしはさまれることはかならずしも関係の通風性をよくするわけではなかった。関係は開きもし、閉じもする。自己は他者に出会うことによって他者を傷つけ、自己を傷つけることがあった。これは福祉ボランティア、つまり、ケアの場面においていえることであった。それはきわめて壊れ物のような関係であるのだ。

このことは、すなわち「私」と「他者」は「違う」ということだろう。だからこそ、自己は再帰的で、存在証明に躍起になるのだった。その意味において「私」は自己中心的である。そうであるから、どちらかがどちらかを傷つける可能性を常にはらんでいる。だが、4章3節で見たように、「自発性」や「自分らしさ」に振りきれられないで、関係や状況にかかわっていく距離のとり方があった。つまり、自己の内に 自分探し を繰り返すのではなく、他者との関係や状況のなかで自己をつくりかえていくことをしなければならない。「私」は再帰的で、存在証明に躍起になるには違いない。ここではその 自分探し の内実を考えなければならない。

ケアする側/ケアされる側、両者とも「私」であるかぎり自己中心的で、存在証明に躍起になる。「私」と「他者」は違う。けれど、その差異を隠蔽してはならないのだと思う。おそらく、そのことはケアという関係からは遠くはなれて、衝突をもたらすかもしれない。けれど、衝突しひびが入りかけても対話する用意があること。互いに自己を、関係を更新していくこと。その意味において「対等」な関係が成立する。

参考文献

- Anthony Giddens ,1990,*The Consequence of Modernity*. = 1993 (松尾精文・小幡正敏訳) 『近代とはいかなる時代か?』而立書房
- 安積純子、岡原正幸、尾中文哉、立岩真也 1990 (=1995 増補改訂版) 『生の技法 家と施設を出て暮らす障害者の社会学』藤原書店
- 浅野智彦 1997 「自我論になにができるか」奥村編 『社会学になにができるか』八千代出版
- 出口泰靖 2000 「『呆けゆく』人のかたわら(床)に臨む 『痴呆性老人』とケアのフィールドワーク」好井、桜井編 『フィールドワークの経験』せりか書房
- 古田暁監修、石井敏、岡部朗一、久米昭元 1987 『異文化コミュニケーション』有斐閣
- 原田隆司 2000 『ボランティアという人間関係』世界思想社
- 長谷正人 1991 『悪循環の現象学 「行為の意図せざる結果」をめぐって』ハーベスト社
- ホーキング青山 2002 『身障者・お笑い芸人という生き方』榎出版社
- Hochschild, A. R., 1983, *The Managed Heart: Commercialization of Human Feeling*. University of California Press=2000(石川准、室伏亜希訳) 『管理される心 感情が商品になるとき』世界思想社
- 石川准 1992 『アイデンティティ・ゲーム 存在証明の社会学』新評論
- 1999 『人はなぜ認められたいのか アイデンティティ依存の社会学』旬報社
- 、長瀬修編 1999 『障害学への招待 社会、文化、ディスアビリティ』明石書店
- 2000 「感情社会の感情言説 作為的でも自然でもないもの」 『思想』907号 岩波書店
- 金子郁容 1992 『ボランティア もうひとつの情報社会』岩波書店
- 菅野仁 2003 『ジンメル・つながりの哲学』日本放送出版協会
- ケアする人のケア・サポートシステム研究委員会編 2001 『生命に寄りそう風景』財団法人たんぼぼの家
- 2002 『生きなおしの物語を紡ぐ』財団法人たんぼぼの家
- 黒沢惟昭 1997 「社会教育とボランティア・ネットワーク」、日本社会教育学会編 『ボランティア・ネットワーク 生涯学習と市民社会』東洋館出版社
- 森口弘美 2001 「ボランティアをケアする」 「ボランティア白書 2001」編集委員会 『ボランティア白書 2001』社団法人日本青年奉士協会
- 森真一 2000 『自己コントロールの檻 感情マネジメント社会の現実』講談社
- 永山智子 2002 「佐倉市立美術館におけるボランティア活動」千葉県博物館協会編 『MUSEUM ちば 千葉県博物館協会紀要』第33号
- 中野敏男 2001 「ボランティアとアイデンティティ 普遍主義と自発性という誘惑」 『大塚久雄と丸山真男 動員、主体、戦争責任』青土社

- 仁平典宏 2002 「戦後日本における『ボランティア』言説の転換過程」 関東社会学会 『年報社会学論集』 第 15 号、
- 2003 「権力としてのボランティア活動」 ソシオロギス編集委員会 『ソシオロギス』 第 27 号
- 日本社会教育学会編 1997 『ボランティア・ネットワーク 生涯学習と市民社会』 東洋館出版社
- 西研 1995 『ヘーゲル・大人のなりかた』 日本放送出版協会
- 岡原正幸、山田昌弘、安川一、石川准 1997 『感情の社会学 エモーション・コンシャスな時代』 世界思想社
- 奥村隆編 1997 『社会学になにができるか』 八千代出版
- 1998 『他者という技法 コミュニケーションの社会学』 日本評論社
- 2001 『エリアス・暴力への問い』 勁草書房
- 大平健 1995 『やさしさの精神病理』 岩波書店
- 大阪ボランティア協会監修、巡静一、早瀬昇編 1997 『基礎から学ぶ ボランティアの理論と実際』 中央法規出版
- 大澤真幸編 1996 『社会学のすすめ』 筑摩書房
- 編 2000 『社会学の知 33』 新書館
- 小澤巨編 2001 『「ボランティア」の文化社会学』 世界思想社
- 李妍焱 2002 『ボランタリー活動の成立と展開』 ミネルヴァ書房
- Robert Coles, 1993, *THE CALL of SERVICE*. = 1996 (池田比佐子訳) 『ボランティアという生き方』 朝日新聞社
- 佐々木正道編 2003 『大学生とボランティアに関する実証的研究』 ミネルヴァ書房
- 佐藤郁哉 1992 『フィールドワーク』 新曜社
- 崎山治男 1999 「感情管理化する社会と自己 感情労働論の展開から」 庄司興吉編 『共生社会の文化戦略』 梓出版社
- 渋谷望 1999 「参加への封じ込め」 『現代思想』 5月号 青土社
- 、藤澤由和 1999 「福祉社会における参加概念の位置付け」 関東社会学会 『年報社会学論集』 第 12 号
- 嶋崎吉信、清水直子編 2001 『がんばれ美術館ボランティア』 淡交社
- 鈴木廣 1989 「ボランティア行為の福祉社会学」 広島法学会 『広島法学』 第 12 巻、第 4 号
- 高萩盾男 1996 「高齢社会とボランティア」 高橋勇悦、高萩盾男編 『高齢化とボランティア社会』 弘文堂
- 竹内敏晴 1975 (= 1988、筑摩書房) 『ことばが劈かれるとき』 思想の科学社
- 1997 『ことばとからだの戦後史』 筑摩書房
- 淡交社美術企画部編 1999 『私も美術館でボランティア』 淡交社
- 辻野理花 1999 「ボランティア活動と異文化交流」 岩崎信彦、鶴飼孝造、浦野正樹、辻勝

- 次、似田貝香門、野田隆、山本剛郎編『阪神・淡路大震災の社会学 第1巻』昭和堂
- 浦野正樹、三田啓一、海野和之編 1996『社会参加とボランティア』早稲田大学社会科学研究所
- 早稲田大学社会科学研究所都市研究部会 1996『阪神・淡路大震災における災害ボランティア活動』早稲田大学社会科学研究所
- 鷲田清一 1996『じぶん・この不思議な存在』講談社
- 1999『「聴く」ことゝの力』TBSブリタニカ
- 渡辺一史 2003『こんな夜更けにバナナかよ 筋ジス・鹿野靖明とボランティアたち』北海道新聞社
- 山縣文治、津崎哲朗、小山隆、荻野孝、明石隆行編 1994『福祉の仕事』朱鷺書房
- 要田洋江 1999『障害者差別の社会学』岩波書店
- 好井裕明・桜井厚編 2000『フィールドワークの経験』せりか書房